

『顔かおの無ないセックス』

作者 浅羽一

テーブルの上に、静かに封筒が載せられる。「今回の分よ。二十万、入ってるわ」。ソファに座ろうともせず、彼女はテーブルの脇で立ったままそれだけを言った。

だから僕もまた、ソファに座る事なく、自分達の間置かれた封筒へと一瞬だけ視線を落とす。けれど、僕はもうそれ以上、それに対して何かをしようとはしなかった。

「確認しないの？」

すると、彼女がそんな事を問うてくる。僅かに傾げられた首につられて、かすかに癖の付いた長い黒髪が、柔らかい動きで毛先を揺らす。

僕は彼女の瞳を真っ直ぐに見つめ返しながら、いつも通り「必要ないよ」と首を横に振った。

「ずいぶんと信用されているのね、私」

からかいめいた口調だったが、そう言った彼女の表情は、確かに少なからず嬉しそうなものだった。

だからこそ、僕は否定しなかった。「まあね」。代わりに、軽く笑いながら頷き返した。だって真実など、それこそ今は必要ないのだから。

「じゃあ、始めましょうか」。仄かに恥じらった風な、しかしそれ以上に期待しているだろう声を残し、彼女は返事も聞かぬまま隣室へと歩いていく。「隣室」と言っても、ソファやテーブル、その他の簡単な調度品が置かれたこちら側と、大きなベッドがあるあちら側を隔てているものは、「壁」と呼ぶにはあまりに相応しくない透明なガラスだけだ。とは言え、そんな扉もないガラスの板でも、境界線としての役割は十分に果たしていた。その証拠に、ガラスの向こうの光景は、何故だかやけに遠く見えた。

「ねえ、早く来てよ」

と、そんな僕に対して、あちら側の彼女が甘えた声を出してくる。薄いベージュのスーツや清潔そうなブラウス、ストッキングや靴などはすでに脱がれ、彼女はもう透けるような白い肌に、二着の紅い下着だけを纏った格好になっていた。

僕は「うん」と頷き、表情を整えて、感情の大半を心の奥底へとしまい込む。一步、近付くたびに、僕は透明になっていく。

「今夜も、素敵な夜になりそうね」

ベッドの脇で待つ彼女が、蠱惑的な眼差しを浮かべて、そんな事を言ってきた。

だから僕は、顔に微笑みを貼り付けたまま「うん、そうだね」と頷いて、見えない境界線を踏み越えた。

それはきつと「運命的だ」と言われれば、確かにそうかも知れない程度には派手なのだろう。けれど、そもその前提として、僕は運命なるものを信じていないのだし、そうでなくとも改めてその「出会い」を顧みても、やはりどうにもそんな洒落た風には思えない。だって、僕がそれを思い出した時、その記憶に手を引かれるようにして心に浮かんでくる想いは、ドラマや映画でお目にかかれそうな「息が詰まるほどの切なさやときめき」などでは決して無く、いっそ呆れにも近い可笑しさで。顔に浮かぶのも、潤んだ瞳の微笑ではなく、苦笑にも似た微妙な笑みであるのだから。

○

深夜一時半ともなれば、基本的に客はほとんど来なくなる。ましてや、季節は夏を終え、そこが駐車場もない小さなコンビニで、しかも静かなオフィス街の外れに位置する場所であるなら、尚更に。

いくら二十四時間営業していても、さらには酒まで扱っていても、辺りに大した遊び場や盛り場が無く、ビジネスホテルやバス停だって近所に無いと言う立地条件では、忙しくなるはずがない。とは言え、客が全く来ないからと言って、やるべき仕事は多少なりとあるのだが。

だからその日もまた、僕はいつも通り、適当に店内の掃除や商品のチェックと整理などをしながら、静かに、緩やかに流れる時間を過ごしていた。ちなみに、仕事の量の問題ではなく、防犯上の理由から、僕以外に雇われている二人目のバイトの男の子は、店の奥ですやすやと寝息を立てていた。本来なら起こすべきなのかも知れないが、決して悪い子ではないし、加えて彼は最近、大学の勉強やサークル活動だけでなく就職活動までして疲れているみたいなので、問題がなければそのままにしておいてあげても良いだろう。それに、正直な所、いくら悪い子でないとと言っても、やはり一人の方が気楽で良かったし。ふと壁の時計を見てみれば、時刻は午前一時四十六分。相変わらず客の来る気配は無い。なので今の内にちよつとだけ一息吐こうと、レジの奥へと向かおうとした、その時だった。

唐突に入り口の扉が開き、僕は反射的に「いらっしやいませー」と声を出した。そして何となく「ちようど良かったな」と思いながら、そのままレジの所で客を迎える。

手動式のガラスの扉を重たそうに押し入ってきたのは、気怠げな雰囲気を身に纏った、二十代半ばほどのスーツ姿の女だった。

白い肌には黒い髪と紅唇が映える、その客は、きつと穏やかに、もしくは艶やかに微笑んででもいれば、「美人」という形容を冠されるに全く問題ないだろう美貌を持っていた。だが、どことなく不機嫌そうな表情を浮かべ、体を引きずるような鈍重な歩みで真っ直ぐに酒類が並ぶ棚へと進む姿は、お世辞にも魅力的とは言えなかった。

酔っぱらいか。僕は、心の中で結論付ける。いっそ滑稽なほどにも悲しい矛盾も全て

綺麗に片付けられる、とても便利な表現だ。事実、僕の前を通り過ぎていった彼女の頬と目は、ちよつとくらしい化粧では誤魔化しきれないまでに、赤かった。

思わず、内心で苦笑した。一体、何をそんなに忘れたいのだろうか。はたまた、何にそんなに追い詰められているのだろうか。つついそんな事を勝手に考えてしまうほど、近くに備えられている籠を手にとつて、その中に片っ端から酒を、しかも缶ビールや缶チューハイなどではなく、明らかにアルコール度数の強いスピリッツの瓶を入れていく姿は、痛々しくさえあった。

色々と溜まつてるんだろ。ぼんやりと、そんな事を頭に浮かべる。まさしく他人事と言った感想だが、現にそうであるのだから仕方ない。所詮、僕は単なるコンビニの店員で、彼女はたまたまそこに来た酔っぱらい客だ。僕達の繋がりなど、僕が彼女からレジで幾らかの金を受け取り、お釣りを渡す、その二分にも満たない程度の些細なものでしかない。ましてや、返すお釣りが少なければ、その時間はもつと短い。それが済めば、終わりなのだ。そしてもしかしたら、僕の一生の中ではもう二度と、顔を見る事さえ無い相手なのかも知れない。まるで見覚えのない顔なのだ、これから先に見る事が無くたって不思議ではないだろう。

そう、それだけの事……のはずだった。

「ちよつとつ」

いきなり、明らかに怒った様子で、彼女が僕に声を掛けてくるまでは。

「は、はい」

「どういう事よつ」

とりあえずすぐさま彼女の下へと駆け寄つたものの、あまりに突然の詰問にまるでわけが分からず、「はあ……」と曖昧な返事しか出来ない。

すると、彼女はそんなこちらの態度にさらに機嫌を損ねたらしく、何となくろれつの怪しい、ふわふわと浮いている様な口調で怒鳴ってくる。「ちよつとお、何でなのよつ」。改めて、相手が「酔っぱらい」であることを実感した。

「……あの、どうされました」

だが、いくら酔っぱらいだとは言え、客は客だ。なので、僕は何とか彼女の言いたい事を理解しようと、出来る限り冷静に状況を把握しようとする。

直後、彼女は「だからあつ」と言つて、僕の眼前に籠を持っていない方の手の人差し指を突きつけると、続けてそれを棚の方へと向けた。

「何でこれがないのよつ」

そこで僕は、彼女の言葉と、その指が示す先を確認し……。

ようやく、彼女の怒りの原因を理解した。

「すいません。そちらはただ今、切らしておりまして……」

僕は頭を下げつつ、そう説明する。彼女はどうかやら、その棚でジンだけが売り切れてしまっている事にご立腹みたいだった。

「あのねえ、私はあ、これが一番好きなの。これ以外は飲みたくないの、これが良いのつ」

「そう言われましても……。本当に、申し訳ありません」

僕は、ちらりと視界に入ってきた籠の中身を無視して、ひたすら謝る。そこにはもうすでに、テキーラとウォツカとラムの瓶がそれぞれ並んで入っていた。

「分かっているの？私が今、どれだけこれが飲みたいかつ」

そんな事を言われても、分かるはずがない。しかしながら、そこは客商売の厳しさ。ましてや、相手はまともな論理の通じない酔っぱらい。

：勘弁してくれ。僕は心の中だけで溜息を吐いた。そんなに飲みたきや、別の店を探せば良いだろう。続けてそう思った。

すると、まさかそんな胸中を感じ取られてしまったのだろうか。だとすれば、この酔っぱらいはとんでもなく質が悪い部類に入るだろうが。彼女はいきなり、こんなことを言い出した。「買ってきて」。

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

「私はあ、これがあ、欲しいの。だからあ、今すぐに買ってきて。分かった？」

「い、いや…。それは、あの、ちよつと…」

とは言え、ようやくその言葉の意味を把握した後も、やはり彼女の思考回路だけは理解出来ないままだった。

「ほらあ、さっさと行ってよ」

そんな事、出来るはずがない。内心の眩きが、いつしか悲痛な叫びへと変わる。

けれど、彼女は一向に僕を許してはくれない……………どころか、さらに状況は悪化する。

「ねえ、早く、早く行ってきて」

「いや、ですから僕は—」

「早く早く早く早く」

「ちよつと落ち着いて…」

「はーやーくーっ」

痙攣を起こした幼子さながらに、彼女はこちらの言う事も聞かずにわめく。僕はそれに、ほとほと困り果てながらも、何とか彼女をなだめようとして…。

「とりあえず落ち着きましょう。ね？」

「早く早く早く早く。はーやー…う…」

と、そんな彼女の声が「く」を形作ろうとした、その時だった。

「…げええええつ」

「わあっ」

刹那の間を置いて、彼女が盛大にその胸の内を吐き出した。ある意味、それはどんな告白よりも、一層に切実なものだった。実際、僕は本当に仰天した。

「ちよつ、ちよつと、大丈夫ですかっ」。反射的に回り込むようにして吐瀉物を避けながら、僕は深々とお辞儀するみたいな格好のまま動かなくなった彼女に、慌てて声を掛ける。「ねえ、お客さんっ」。

すると彼女は、まるでバネ仕掛けの人形めいた動きで唐突に上半身を起こして…。

「…：…帰る」

憑き物が落ちたみたいに静かな表情で息を吐くと、いきなりそう眩き、そのまま籠を床に置いて歩き出した。その姿は、一言で表すとすれば、「やるだけやって満足した」と言う風なものだった。

「あ、あの…」

そして彼女は本当に、僕の戸惑いや呼び掛けを完全に無視して、さっさと店を後にした。

やがてそこには、呆然と立ち尽くす僕と、買われる事の無かった酒、それから床に溜まって刺激臭を放っている、黄色の絵の具を乳汁で溶いたような濁水だけが取り残される事になった。

「…って、早く片付けなれとつ」

しかし、そんな時間の止まったかのごとき静寂もほんの束の間、僕はようやく我に返ると、急いで店の奥へと掃除用具を取りに行った。この時の心情を喩えるとすれば、「悪夢から覚めた所が悪夢の真つ只中」と言った感じだろうか。

「松本^{まつもと}くん、悪いけど起きてつ。ちよつと手伝つてつ」

急に騒々しくなった店内だが、やはり、客はただの一人もいなかった。

2

「…あ、あの」

きわめて衝撃的な「出会い」から、およそ二日。例のごとく暇な店に、その客がやって来たのは、もうすぐ午後十一時半に差し掛かるうかという頃だった。

いくら少ないとは言えそれでも相応の人数の客を相手にしており、さらにはただでさえ人の顔を覚える事の苦手な僕であったが、当然とすべきなのだろうか、その客の顔だけは忘れてなどいなかった。ただし、悲しいかな、それは決して色っぽい理由によるものはなかったが。

「先日は、その、本当に…」

レジの前に立ち、心底気まずそうに、彼女はぼつぼつと単語を発する。今日はスーツ姿ではなく、紺色のジーンズと明るい水色のシャツという、わりとラフな出で立ちであったが、そんな服装の軽さに関係なく、気の毒だと思えるほどに沈んだ表情を見れば、本当に真剣に反省：というか、後悔しているのだろうかとはつきり分かる。肌は白く、今日は酒を飲んでいないだろう事は一目瞭然だったが、にもかかわらず、その目だけはあの晩と同じく赤かった。

同情したというわけでは、なかった。ただ、漠然と理解しただけだ。どんな人間にだって、多かれ少なかれ嫌な事や不幸は付き物で。仮に例外があるにせよ、少なくとも彼女はそうじゃないのだろう。だからこそ、時には羽目を外したり、酒の勢いにすがってみたり、思い切り感情を爆発させたり、また、溺れるほどの快樂に浸ってしまいたい夜があったって、詮無き事だ。勿論、それは時に、他者を害したり、責められるべき罪を伴う場合だつてある。そしてまた、常識的に考えれば、今回の彼女の行動と、その結果は、きつと文句を言われて然るべきものであるだろう。だけど同時に、それはきつと、許されたって構わないものでもあるはずだ。それに、せつかくこうして謝罪に訪れてくれた彼女を、これ以上追い詰めた所で、ただただ虚しくなるだけに違いない。

だからこそ僕は、こう言った。「もう、大丈夫ですか」。

特別に意図したつもりなどなかったが、それを言った後、それは「肉体的に」という意味と、「精神的に」という意味の二通りの取り方が出来るだろうと思つた。勿論、僕としてはあくまで「肉体的に」という意味のつもりであつたのだが……。

この時、彼女は一体どちらの意味で受け取つたのだろうか。当然ながら、僕に真実など分かるはずもない。けれどほんの刹那、彼女が浮かべた酷く悲しげな眼差しと目が合った時、僕は何となく後者なのかも知れないと感じさせられた。

「だ、大丈夫です。こつちこそ、本当にご迷惑をお掛けしてすみませんでした」

とは言え、そんな切なげな瞳は、焦つたような勢いで彼女が頭を下げてきた為に、あつという間に見えなくなる。

僕はその彼女の行動に、少なからず困つてしまつた。

「あの、もう良いですから」

いくら事情があるにせよ、端から見れば、それは異常な光景だろうからだ。だって、彼女は「お客様」で、こちらは単なる「従業員」。にも関わらず、彼女が僕に頭を下げている場面など、どう考えたって良いものじゃない。その証拠に、雑誌売り場の前で立ち読みをしている唯一の客だけでなく、店内でお弁当などの商品の賞味期限チェックをしていたバイトの男の子まで、驚き半分、面白半分と言つた視線をちらちらとこちらに向けてきている。ちなみに、ほぼ毎晩、この店に出勤してきている僕と違い、松本くんは今日はお休みだ。

「……その、他のお客様さんも、見てますし」

と、僕の囁きに、彼女もようやくその事実気が付いたのだろう。

「本当に、すみませんでした」

最後にもう一度だけそう言つて、静かに頭を上げてくれた。その時の彼女の表情は、とてもかすかにはあつたけれど、先ほどまでよりも柔らかいものだった。僕は、「やつぱり、冷静に見れば綺麗な人だなあ」と、ある意味ではかなり失礼な感想を心に浮かべた。同時に、その瞳に「勿体ないな」という思いを抱いた。

だから僕は、この時、とても素直にその言葉を紡いでいた。同情でも憐憫でもなく、下心など有りはせず、それどころかほとんど何も考えていないまま、ただただ正直にそう言つて、笑つた。「元氣、出して下さいね」。

おそらく、その瞬間こそが、僕と夏子の始まりで、そしてきつと、その言葉こそが、後に身勝手な僕の矛盾を暴く何よりも明確な証拠だつた。

○

彼女はその名を、「澤木夏子」と言った。

「やあ、今日も頑張つてるわね」

「そっちこそ、毎日こんな時間まで大変ですね」

あの日、僕が事情も知らないくせに、生意気にも彼女に対して「元気を出せ」などと言った日から、早くも一週間。あれ以来、夏子はほぼ毎日、午後九時過ぎというわりと決まった時間に、店に顔を出すようになった。そして彼女がレジに商品を持ってきて、会計を済ますまでのほんの僅かな一時が、僕達二人にとつての会話の時間となつてもいた。

「つて言うかさ、村瀬くんつて、何歳なの」

村瀬真吾しんご。それが、僕の名だ。「え、僕ですか。今年で二十七になりましたけど」。

「へ？」

その瞬間、夏子の瞳が丸くなり、顔に驚きが張り付けられる。僕はそんな彼女の様子に、「どうしました」と視線で問いかけた。

「あ、いや、その…」

すると夏子は、急に困った、もしくは見ようによつては少なからず恥ずかしそうな表情を浮かべて、こんなことを言った。「私てつきり、村瀬くんつて、もつと下かと思つてた」。

僕はそれに「そう」と軽く声を返しながら、まあ、こんな所で毎晩バイトしてたら、そうも思ふかもなど、頭の中でのみびりと頷いた。

「つて言うか、私と同じ年つて、嘘でしょ」

「こんなことで嘘なんか吐きませんよ」

「だって、ほら。敬語だし、『僕』だし。大学生か何かだとばかり…」

「そんな事言われても、澤木さんはお客さんだし、それに『僕』つてのはもう口癖みたいなものだから」

「それは、まあ…。でも…」

僕が説明しても、夏子はどうにも釈然としない様子だ。そこで僕は自らを正当化する為に、「お返し」という意味も込めて、こう言った。「と言うか、澤木さんも二十七歳だったんですね」。

それは勿論、僕にしてみれば、彼女が言ったのと同様に「もつと若いかと思つてました」というつもりでの発言だったのだが、夏子は全く逆の意味に捉えたらしかった。

「…何よ。『老けてる』つて、言いたいのに」

「まさか…」

一気に夏子の眼差しが剣呑な光を帯びて、僕は慌てて言い繕う。「もつと若いと思つてたつて意味ですよ」

「…ふん」。それに対して夏子は、多少なりと不服そうな口調であつたものの、最終的には納得してくれたのか、「まあ、良いけどさ」と言った。どうやら、彼女に年齢の話は禁忌らしい。僕は頭の片隅に、そのことをしっかりと刻みつけた。

それから僕はとりあえず話題を逸らす為に、夏子に商品の合計金額を告げる。

五〇〇mlサイズのジュースと、おにぎりが二つに、インスタントのパスタが一つ。千円にも満たない額であつたが、夏子はバッグの中から財布を取り出し、そこから一万円札を一枚、引き抜いた。「大きいけど、これで良い？」。

「ええ」

僕はそれに、いつも通り頷いて万札を受け取る。他の店ではどうだか知らないが、彼女は少なくとも此処では必ず、それで支払うからだ。どんなに少額の買い物でも。

「あああ。何か最近、食事がどんどんわびしくなっていく感じだわ」と、僕が釣り銭をレジから取り出す間、彼女がそんな事を呟いた。

なので僕は、何の気なしにふと思つた事を口にする。「料理とかはしないんですか」。彼女は、かすかに苦笑を浮かべながら答えてきた。「最近忙しくて、そんな気力もないかな」。

「さつきも言いましたけど、毎日遅くまで大変ですね」

「そっちだって、こんな時間に働いてるじゃない」

「でも、僕は昼間は休みですから。澤木さんは、昼間も頑張っているんでしょう」

夏子は「まあね」と軽く頷きながら、「ただでさえ仕事が溜まってた上に、こないだ二日ほどずる休みしちゃったからさ。もうしばらくは、残業が続くかな」と苦笑した。

僕はこの時、彼女の笑みの中に、少なからず自身への嘲笑めいたものが混じっている事に気が付いた。だが、だからといって、あえてその傷口に触れる気はなかった。人にはそれぞれ、言いたくない事や、言えない事、何より言われたくない事があるものだ。彼女にとつて、それが果たしてどんなものであるのか、正確な事など僕には知る由もなかったけれど、それでも軽々しく話題に上らせるべきでないだろうと言う事くらいは分かっていたから。

だから僕は、ただ素直に笑つて言った。「まあ、あまり頑張りすぎないで下さいね」。

夏子はそれに、一瞬だけ口を閉ざすと、やがて「うん」と小さく頷いた。

僕は「はい」とだけ返事をし、釣り銭を渡した。そつと触れた彼女の手は、男の僕の手よりもひんやりとしていた。

「じゃあ、そろそろ行くかな」

「暗いし気を付けて帰って下さい」

「うん、ありがとう」

そして夏子はジュースなどが入った袋へと手を伸ばし…。

「あ、そだ」。けれどそれを掴む直前、何かを思い付いたのか声を漏らして動きを止めた。

「どうしたんです」

それから彼女は僕の問いかけに対して、「もうさ、その敬語は無しにしてよね」と明るい口調で答えてきた。

「え、でも…」

「良いじゃない。私達、同いなんだし。それに、何となく敬語って遠い感じがして、友達とかに使われるの好きじゃないんだ」

「…友達、ですか」

正直、驚いた。まさかそんな単語が飛び出てくるなんて、夢にも思っていなかったからだ。だって彼女は「お客様」で、僕はただの「従業員」なのだと、所詮はただそれだけの関係に過ぎないのだと、思っていたから。

「…迷惑、だったかな」

不安そうな眼差しを浮かべ始めた夏子に、気付けば僕は「とんでもない」と返していた。「じゃ、決まりね」

一転して晴れやかな表情へと変わった彼女の言葉に、僕は僅かに気恥ずかしさを覚えつ

つも「…うん、決まり」と返した。

今度こそ袋を掴み、「またね」と去っていく後ろ姿は、何故だかやけに満足そうだった。

3

夏子に「友達」だと言われたから、いつしか彼女との会話は唯一と言ってても良いほどの楽しみへと変わっていた。だからこそ、さらに数日ばかりが過ぎ、急に彼女が姿を見せなくなった時は、決して少なくない寂寥感を覚えもした。

だけど同時に、「きつともう、仕事が全て片づいて、残業をしなくてよくなったんだな」と、奇妙な安心感みたいなものも生まれていて。僕は結局、「まあ、しょうがないか」という一言で全てを結論付ける事にした。名残惜しさはあつたけれど、諦める事には慣れていた。

そうして、彼女が店に来なくなつて、およそ一週間が経つた頃。徐々に僕の中から夏子の事を思い出す時間が失われつつあつた中。その日は、唐突にやってきた。

「あ、いらっしやい。久しぶりだね」

時刻はもうじき日付が変わろうかと言う辺り。例のごとく閑古鳥が鳴いている店に入ってきたのは、酷く疲れた雰囲気のスーツ姿の夏子だった。

「…うん、久しぶり」

夏子は僕の言葉に、全くもって覇気のない声と笑みだけを返し、そのまま、雑誌の荷ほどこきや整理していたこちらの方ではなく、店の一番奥にある酒類の売り場へと歩いていった。

僕はその様子に、戸惑いと、奇妙な既視感を覚え、思わず仕事の手を止めた。

やがて、酒類が置かれてある棚の前へ辿り着いた夏子は、そこから一本の瓶を手にとつて、緩慢な歩調でレジの方へと向かつていった。

一足先にレジへと着いていた僕は、今日はちゃんとレジ付近で仕事をしていた松本くん、「ごめん、僕がやるよ」と小声で言つて、すでに夏子を待っていた彼とレジを代わつてもらった。松本くんは人なつっこい笑みを浮かべただけで、すんなりとその場をどいてくれ、さらにおそらく気を遣ってくれたのだろうが、そのまま僕が先ほどまでいた雑誌売り場へと歩いて行った。数秒後、ひよろりと背の高い青年の頭が、ずっと棚の向こうに消える。

「どうしたの」

松本くんを入れ替わりにやって来た夏子に、僕は静かに問いかけた。「何かあつた?」。

けれど夏子は、それには答えず、代わりに僅かに頬を歪ませて、こう呟いた。「…今日はさ、あるんだね」と。

最初、何の事を言われているのか、さっぱり分からなかった。だが、直後に僕の視線が

彼女の瞳と、彼女が持ってきた商品を結びつけ、ようやく脳はその言葉の意味と、そしておそらくは「彼女が再び傷ついているのだろう」という状況を把握した。夏子が持っていたのは、あの日、遂に買われる事の無かった透明なジンの瓶だった。

とは言え、それが分かった所で、肝心な内容を一つとして知らない僕には、結局、何かを言う事など出来なかった。

夏子が、とても小さな、ともすれば聞き逃してしまいそうな声で、「…本当に、馬鹿みたい」と漏らした。

だけど、やはり僕には一言も返せない。すると彼女は、今度は少しばかり大きく、しかも明るい口調で言葉を並べ始めた。ただし、聞いていて楽しくなれる声音では決して無かった。「ったくさあ、マジで嫌になるわよね」。顔はこちらへ向けられていたけれど、彼女の瞳は僕を見ていなかった。

「あの男、自分からいきなり別れを切り出したくせにさ。今度は急に『俺が悪かった。頼むから、もう一度だけやり直してくれ』だって」

「……………」

「本当に、勝手な話よね。私がどんな思いで別れを受け入れたと思ってたんだか」

自傷じみた独白は続く。「こっちの気持ちとか、完全に無視だもの。参るわよね」。その言葉は切れ味鋭い剃刀のように……いや、むしろ逆に、ひび割れて刃が欠けたナイフのごとく、彼女自身を切り裂き、いつそその表皮だけでなく内側を抉り、引きちぎる。そうして出来た傷口は、出鱈目で、惨烈で、どんな傷よりも今のその傷こそが何よりも酷く、彼女の心に痕を残すのだと容易く信じられそうなものだった。

「でもさあ、本当に馬鹿で下らないのは、あいつじゃなくて、私」

嘲笑の対象は、紛れもなく夏子自身で。どうしようもない僕は、とにかく視線を逸らす事だけはしないでおうと決めた。

「ちよつと考えたら分かるはずなのに。…うん、きっと本当は分かってたはずなのに。それなのに、必死で謝ってくる声を聞いてたら、『今度だけは、許しても良いかな』なんて思っちゃってさ。…それで結局、またすぐに捨てられてやんの」

「……………」

「…本当に、ついさつきよ。あいつがさ、最後に私に何て言ったか、分かる？」

「いや…」

そんなもの分かるはずがなかったし、そもそも分かりたいとさえ思わなかった。

それなのに夏子は、嗤いながら、答を突きつけてきた。「やけに真剣な顔をしてさ、『やっぱり、何か違うんだよな』だってさ」。その笑みは、きつと言葉で表現すれば「泣き笑い」というものこそが最も相応しいだろうもので。その証拠に、必死に作り笑顔で誤魔化そうとしているのだろうけれど、確かに涙は溢れてなどいなかったけれど。

「大体さ、『違う』って何よ。それでほんの一週間でまた返品？ったく、こっちは通販の商品じゃ無いっつーの」

それでも瞳は確かに赤く。彼女はきつと、泣いていた。

「……………」

不甲斐ない話なのだろうけれど、僕にはやはり何を言って上げればいいのか、分からなかった。

『泣くなよ』

『泣きなよ』

そのどちらでも良いから、言つてやれば良かったのかも知れない。けれど前者は、彼女の最後のプライドを傷つけてしまう気がした。そして後者は、彼女の自嘲を認めてしまう事になると思えた。だから結局、僕にはどちらも言えなかった。

「：便利な商品じゃ、ないっつーの」

「夏子：」

だけど、同時に、僕にはたった一つだけ、彼女に与えてやれるものがあつた。それは言葉でもあり。また、行為でもあり。何より、僕を僕たらしめているものであつた。

：でも、やはり僕にはどうしても、それを選択する事が躊躇われた。馬鹿じゃないかと嘲られるのが怖かつたからではない。ふざけるなど罵られるのが恐ろしかったからではない。だって、言つてみればそれは単なる逃避であつたから。僕にしてみても、彼女にとつても。仮に、本当にそれが受け入れられた所で、所詮はただの逃避でしか無いのだから。それに僕はきつと、ただ単純に、彼女に対してだけは、その選択をしなくなつたのだ。なぜなら、彼女はもうすでに僕にとつて、その会話を「楽しい」と思える程度には、急に会えなくなつた事を「寂しい」と感じられる程度には、大切に大事な友達であつたのだから。いや、それはもしかしたら、いつしか友情だけではなく、ほんのかすかにではあつただろうけれど、愛情にまで届こうとしていたのかも知れない感情だつたから。

だからこそ、僕は、せめて彼女にだけは、汚辱にまみれた自らの真実を晒す事だけは――。
「ああ。何かもう、死にたいや」

――したく、無かつたのに。そう、本当に、したくなかつたのに。

そう呟いた彼女の顔が、本当にあまりにも、脆そうなものだつたから。

やはり情けない僕には、「それ」をするしか出来ないみたいだつた。

「：知つてるかな」

突然の問いかけに、夏子は言葉を止めて、今度こそ僕をちゃんと見てきた。

僕は真つ直ぐに視線を受け止めて、言つた。「自分で『死にたい』って言う人はさ。本当は、誰よりも『死にたくない人』なんだつて」。

「え：」

彼女が一瞬だけ戸惑つた風に笑みを消したのは、もしかしたら言葉の意味ではなく、僕の声そのものに反応したからだつたのかも知れない。

けれど、やがて彼女がそれを理解したらしい時にはもう、その戸惑いは即座に冷たい怒りに変わつていた。

感情を押し殺した声で、夏子が問い返してきた。「：もしかして、馬鹿にしてる？」。

僕は即座に否定した。「まさか、とんでもない」。そして何言かを発しかけた彼女を制してきた。『生きたい』と思う生き方があつて、それを誰よりも願うのに、それを叶える事の出来ない人間が、最後の最後に全てを諦めて口にする言葉だから、さ。彼女の怒りを前にしながら、それでも僕は平然と、淡々と、流れ作業をこなす機械さながらに単語を並べていく。「君がもしも、本気で絶望しているのだとしたら。一つだけ、教えて上げるよ」。

「何をよ」

「この世には、そんな絶望なんて容易く忘れられる、現実の樂園が存在するって事を、さ」
「そうだ、僕は知らないし、言えない。そんな方法でしか、誰かを、女性を慰めて上げる事など出来はしない。だって僕は、ずっと、そうする事で生きてきたのだから。ずっとずっと、そうする事でしか生きられなかったのだから。」

僕は、知っている。どんな人間にだって、多かれ少なかれ嫌な事や不幸は付き物で、中にはそんな負の要素に負けてしまいそうになる人もいる。

そしてそんな人にとって、それを慰めてくれるのは、忘れさせてくれるのは。時には、羽目を外して騒ぐ事で。また、時には、酒の勢いにすがってみる事で。さらには、思い切り感情を爆発させてみる事で。何より、溺れるほどの快樂に浸ってしまう事なのだ。

「：何よ、それ。まさか、あなたって宗教とか、そういうのをやってる人？」

「違うよ。そんなんじゃない」

「ならー」

「そんな、神話で謳われるような幻想じゃなく。現実の中で感じられる、快樂。脳が溶けるほどの快樂に満たされた、享樂の時間。：つまりは、最高のセックス」

「なっ…」

「そうだ、それは決して罪などではないのだ。むしろ、許されて構わない事なのだ。ただ、少しだけ、今の僕には…：虚しいだけで。」

「もしも君が望むなら、僕が君に、真の快樂を教えて上げるよ。普通の現実も、死ぬ事でさえ、全部が馬鹿馬鹿しくなるくらいの、刹那の快樂を」

「何を、言ってる…」

「簡単な話さ。要は、『僕をかうのか』って事だよ」

「……………」

「どうする。一度、試してみるか」

僕は、挑発するように、問う。なぜなら、もう始まっているのだから。

それに対して夏子は、およそ数秒間、啞然とした形に表情を固めるも…。

「：何だか、やけに自信満々ね」

「まあね」

「ダメだったら？私、正直、あんまりセックスって好きじゃないわよ」

「その時は、罵倒するなり、嘲るなり、なんならそれこそ、使用の途中で『返品』してくれて構わないよ。最初はあくまで、試用ってやつさ。だから勿論、金も要らない」

「……………」

「全ては、君の願う通りにすればいい」

「…：良いわ。もう、ごちゃごちゃ考えるのも面倒だし…：あなただったら、良いわ」
最後には、小さく笑って、そう言った。

だから僕もまた、心の中で苦笑した。理由なんて、どうだって良いのだ。いや、むしろ、そんなものなどなくて構わない。例えほんの一時でも、何もかもを忘れて、思考を放棄して、ただただ快樂に溺れられれば、それで良い。そうでありさえすれば、その刹那の一時が、残りの全てを誤魔化してくれるのだから。

やがて僕は、ゆっくりと笑みを顔に張り付けて、言った。言葉に皮肉と自嘲を込められる程度には、すでに自信…いや、確信があったから。

「お買い上げ、ありがとうございます」

そして僕はこの夜、「上手い事やっときますから」と言ってくれた松本くんを任せ。店から一番近かったホテルで、彼女を抱いた。

4

「おいで」

下着姿の夏子の手を掴み、優しく、けれど力強く、引き寄せる。夏子は小さな声を漏らしただけで、逆らう事もなく僕の腕の中へと入ってきた。

それから数秒間、彼女の体と頭を柔らかく包み込むように、しっかりと抱き締めた。ヒールを脱いだ夏子は、やけに小さく感じられて。優しく髪を撫でてやると、薄いTシャツの向こうから、かすかな吐息が胸をくすぐってきた。いつしか、僅かに残っていた強ばりも消えて、彼女の体はさらに幾分か柔らかくなったみたいと感じられた。

ゆっくりと、彼女を導き、二人並んでベッドの縁へと腰を下ろす。弾力性と柔軟性が調和したベッドは、とても自然に僕達二人を受け止めてくれた。

彼女の瞳を見つめたまま、指をそっと細い顎へと沿わせ、少しずつ顔をこちらへと向けさせる。夏子は抵抗することなく、一度だけそこから小さな吐息を漏らすと、艶やかな唇を僕の方へと差し出し、目を閉じた。

綺麗な唇だと思った。淡い紅色で彩られた艶やかなそれは、本当に、ただ何かを食し、言葉を紡ぎ、笑顔を飾るといふ為だけに使われるには、勿体ないと思えるほどに。もしも彼女がその事実気付きさえすれば、男など、いとも容易く落とせるだろうに。僕は頭の片隅でそんな事を考えながら、けれど余計な意識は体から隔絶して、自身のそれを彼女の紅唇に触れさせた。

最初は、軽く、唇と唇を一瞬だけ触れ合わせる程度の、儂いキス。だけどやがて、それに、先ほどよりもほんの少しだけ長い、温かいキスが代わり。いつしかそれは、さらなる欲情を誘うキスへと変わる。

すると、それまで閉ざされていた夏子の唇が、酸素か、それとも他の何かを求めてなのか、甘い吐息と共にゆっくりと開かれた。

そこから覗いていたのは、おずおずと、だけど確かに、こちらへと伸ばされつつある妖しい桃色で。だから僕は、最後に彼女の下唇を優しく噛んで、そのままその表面を軽く舌でなぞってから、これまでもよりも遙かに強く彼女を抱き寄せ、濡れた唇の隙間に舌を入れた。華奢な両腕が、僕の背中にぎゅっと回され、着ているシャツが一気にきつくなった。

僕のものよりも熱い舌が、まるでそれ自身が命を持った軟体動物のごとく、差し込まれた侵入者を捕らえようと絡みついてくる。しかし、その動きは少しばかり単調で、何より中途半端だ。

彼女が、「キスなど、まだ数えるほどしかした事のない女」というわけではないだろう。それどころかきつと「愛情の確認としてのキス」ならば、すでに何度も経験しているはずだ。だが、彼女が「快樂の為のキス」を与えられてきていたか、と言えは、それもまたおそらくは、無いのだろう。もしくは、無いに近いはずだ。その証拠に、最初の頃に比べればずいぶんと「慣れて」きている感じはするものの、やはりまだまだ拙い。

だから、しばらくの間だけ夏子の好きにさせていた僕は、しかしそろそろ彼女に立場を分かせてやる事にする。そう、夏子はあくまで「与えられる側」なのだ。なぜなら彼女こそが客なのだから。彼女が僕に快樂を与えようとしてくれる必要は、無いのだ。

「んんっ：」

僅かに硬くなった僕の舌の先端が、抵抗を許さぬ速さで、彼女の上の前歯、その裏側の根本をこするよう刺激する。舌が、たった二センチほどの間を左右に往復するたびに、柔い体が敏感に震えて反応を見せる。

そこで僕は、彼女の望みに応える為に、さらに動きを複雑化させる。上へ、下へ、さらには奥へ。強く、優しく、細かく、広く。緩急を付けて適所を狙う。

夏子は絶え間なく、喉の奥からくぐもった喘ぎを漏らしていた。時折、痙攣するみたいに背中を跳ねさせ、さらに快樂を求めてくる。いつからかもう、二本の腕はすっと落ちてしまっていた。

そろそろ頃合いかも知れない。そう判断した僕は、最後に強く顔を押しつけ、彼女の奥へと舌を伸ばした。肉の塊みたいな粘膜の感触と共に、一層に激しい震えが意識へと届いてくる。脳の中で、彼女の口腔内の形状がありありと再現される。

やがて、緩慢な動作で舌を引き抜き、顔を離すと、夏子はぼんやりと視線を天井に向けて、荒い息をついていた。

僕は幼子を抱くように、改めて彼女の背中に腕を回す。それから「よしよし」と、優しく髪を撫でてやる。

すると彼女はようやく瞳の焦点を合わせ、微笑みを浮かべてきた。それから再び目を閉じて、そのまま全身を委ねてくる。

僕はそれを無言で受け止めながら、一瞬前に見た彼女の表情を反芻する。汗ばみ、弱々しく、だけど嬉しそうに浮かべられた微笑みは、儂くも確かに満足そうなもので。だから僕は、「これで良いんだ」と自分自身に言い聞かせた。

今夜で夏子を抱くのは五回目だったが、相変わらず、僕にはこの「儀式」が必要だった。本当に、そうしなければきつと、強烈な自己嫌悪で先へ進むどころかその場にとどまる事さえ出来なくなるだろう。勿論、そんな事、絶対に表情に出したりはしないけれど。

僕は、彼女から託された体重を左腕で支えつつ、ゆっくりと、夏子をベッドの上に横たえる。腕を抜く時、白いシーツがこすれて小さな声を漏らした。

少しだけ体を離し、一秒もかからずTシャツをベッドの脇に落として、トランクス一枚だけという格好になる。

と、いつの間にも目を開けていたのだろうか。ほんの一瞬だけ外していた視線を再び夏子へ戻すと、彼女はシーツの上に四肢を投げ出したまま、僕の体を眺めていた。「いつも思う事だけれど、本当に細いわね」。

「そうかな」

「なのに、がりがりに痩せてるってわけでもなくて……。羨ましいくらい」

「はは。それは、光栄だな」

僕は、こちらを見上げながら呟く夏子へ笑うと、お返しにこんな言葉を返した。「そう言う夏子だつて、とても魅力的な体をしているよ」。二人の間で決められたルールとして、この行為の最中だけは、互いに下の名前前で呼ぶ事になっていた。

「：嘘。そんな事、無いもの」

しかし、夏子は喜ぶどころか、僅かに自嘲めいた笑みを浮かべるばかり。

僕はそれを受け止めながらも、素直に間違いであると思っていた。だって、白い肌に包まれた夏子の体は、本当に魅力的なものだったのだから。

男が腕を回すには理想的なくらい、滑らかなラインと弾力性を兼ね備えた腰つき。決して巨乳だと言えるほどに豊満ではないが、それでも、仰向けに寝転がった状態でも形の崩れていない胸は、今は赤い下着で隠されているのに、いや、いつそそれさえも利用して、十分な色香を放ちながら見る者を誘惑してくる。伸ばされた四肢は、生来の体質に加えずと続けられていた「訓練」のせいであつたかほとんど脂肪の付かなくなつてしまつた僕のものとは対極的なほど、優柔で温かい雰囲気醸し出している。

本当に、先ほどの彼女の言葉をそのまま返して良いくらい、細身だけれど、それでいて適度な脂肪を併せ持つ肉体は、綺麗で、何より扇情的だつた。

「嘘なんか吐いてないよ」

だから僕は思つたままに彼女の「否定」を否定してやる。

「良いのよ、別に。気を遣つてくれなくても」。それでも案の定、夏子は信じない。そこで少しばかり乱暴だつたが、僕は彼女に真実を証明してやる事にした。

「本当だつて」。静かに体を移し、僅かに開かれた状態で伸ばされていた彼女の足先の辺りに膝を立てる。

「だって、ほら。こんなに軽い」

それから彼女の両足首を両手で掴んで持ち上げ、そのまま一気に、両手を体の後ろへと引いた。「きゃっ」。途端、僕の言葉通り、軽い体は大きく足を広げながらシートの上を滑つてきた。

「ね、嘘じゃない」

「ちよ、やだ：」。自分がどんな格好でいるのか理解したのだろう。僕の太股の上に恥部を突き出す形で尻を乗せた夏子は、顔を赤らめて咄嗟に足を引こうとしてくる。だが、僕はそれを許さない。

「ダメだよ。君がちゃんと答えるまで、このまま」

そして、それどころかささらに右手を上を持ち上げてやる。もう、僕の顔のほとんど真横に、彼女の左膝が並んでいた。「さあ、どうするの」。

しばらく躊躇っていた彼女だが、次第に観念してきたのか、ついには囁きめいた声で「分かつた」と頷いた。

だから僕はそれに笑つて、「うん。じゃあ、僕がこんな事をしたくなるのも仕方ないよね」と、白い膝の裏に舌を這わせた。くすぐったいのか、夏子は体を悶えさせながら途切れ途切れに「約束が違う」と抗議してくる。勿論、そんなもの聞かなかつたけれど。非難の言葉と裏腹に、彼女の足からはもう力が抜けていた。

膝からふくらはぎへ、はたまた太股の内側へ。わざと音を立てながら唇を滑らせ、舌で触れる。淫猥な響きに嬌声が混じり、それに合わせて柔らかそうな胸が上下する。軽く握っただけで折れそうな喉を晒しながら喘ぐ姿に、僕はそろそろ頃合いだろうと束縛していた足を解放してやった。

果たして、彼女は足を引かなかった。一転して、享樂の和声が消えた部屋で、荒い息づかいだけが余韻のように空気を震わせる。

しかし僕にはそんな程度で終わらせてやるつもりなど無く。「まだまだ、これからだよ」。軽く腰を曲げて口付けると、そのまま体を起こす勢いを利用して彼女を持ち上げた。

「：夏子の体、とても温かいよ」

「うん、あなたも：」

触れんばかりに近づく双眸。太股の上に彼女を乗せて正座した僕は、しつかりとその身を抱きかかえ、白と黒の対比が美しい、艶やかな光沢を纏った縞瑪瑙の中心にそれを確かめる。：僕はちゃんと、笑っていた。

互いの額を触れ合わせ、まつげを絡ませる。それから、少しだけ長いキスをした。しつとりとした指が僕の背を這う。

手を使わずに漆黒の奥に潜む可愛らしい耳を探り当て、「美味しそう」と甘く噛む。そして薄い縁に舌を沿わせながら、ゆつくりときめ細やかな肌の上に手の平を滑らせていく。かすかな吐息の変化さえ聞き漏らすまいと澄ました耳にまで、鼓動の波が伝わってくる。指先が、湿った下着の感触を捉えた。

さり気なくブラジャーのホックに指を置き、一瞬で外す。直後、ようやく何をされたのか気付いたのだろう、ほんの刹那だけ鼓膜に届く呼吸音に変化した。

口付ける場所を移しつつ、自分ごと倒れ込む形で、彼女の体を支えたままシーツの上に横たえていく。僕の重さを彼女に掛けないように注意しながら、上の下着を取り去る。夏子は導かれるまま素直に動き、やがて緩やかな曲線を描く雪肌が露わになった。淡い桃色と言うよりも、仄かに赤みの濃い膨らみの先端は、美しい裸身にとっても良く映えていた。

「綺麗だよ、本当に」

「：やだ」

天を向いている鼻の頭に軽く唇で触れ、そこから徐々に動脈を辿って順に彼女の体を降りていく。すぐさま胸へと向かうことはせず、敢えて遠回りをするみたいに鎖骨や脇を舌先でなぞる。甘い香水の向こう側から、夏子の匂いが僕の鼻腔をくすぐってきた。

そうしていよいよ、僕は左の膨らみへと近付いていく。残された距離に反比例して速まっていく胸のリズムに、僕の鼓動まで釣られて少し大きくなる。僕はそれにかすかな驚きと、確かな喜びを感じてしまう。抱いているのはこちらなのに、気を抜けばすぐにでも呑み込まれてしまいそうだった。

唇よりも僅かに早く、僕の手が双丘の麓に到達した。

比べるものが思い付かないほどに優柔な膨らみが、にじんだ汗のせいで手の平に吸い付いてくる。彼女の息づかいを確かめながら、僕はその縁に指を合わせ、そっと、包み込むように優しく揉む。自分とは違いすぎる感触に、改めて彼女の女性と母性を知る。

遅れた到着を詫びるように、唾液に濡れた舌が膨らみの先端に丁寧に触れる。十分に準備されていた彼女の体は、たったそれだけで背筋を震わせ喉を鳴らした。

やがて僕は、それまでの穏やかなものとは異なる動きを愛撫の中に織り交ぜていく。加度的に高ぶっていく夏子の声を聞きながら、求められるままに快感を与えていく。

唇を、舌を、歯を時に単独で、時に一緒に使い。そこへ指を、手を、さらには指紋の凹凸や触れさせている全身の肌さえも利用して、それらを緩急を付けて巧みに連携させていく。ざらついた舌と硬い歯の合わせ技が気に入ったのか、夏子が僕の両肩に爪を食い込ませながら甲高く鳴いた。直後、彼女の指から力が抜けた。

僕は顔を上げた。夏子は目を閉じて短い呼吸を繰り返していた。大きく開けられた口元から垂れている一筋の涎を吸い取ってやると、そっと瞼を持ち上げた彼女は嬉しそうに微笑んでくれた。僕もまた、目を細め、口元をゆるめた。夏子が唇をちよつとだけ尖らせてきて、僕はそれに己を重ねた。

均整の取れた輪郭をかたどるように手を這わす。指先が肋骨の隙間を通るたびに、彼女がくすぐったそうに身をよじった。

「：ほら、力を抜いて」

形の良い尻を持ち上げ、するりとショーツを脱がせてしまう。そうして彼女は全てをさらけ出す。僕の両脇に投げ出された太股、その間で丁寧に処理された黒い茂みが、しつとりとこちらを誘っていた。

「あんまり、見ないで：」

「照れないの」

膝を立て、手を秘所にあてがい、身を縮めるように恥じらいを訴えてくる姿に、僕は軽く応えて彼女の左足を右腕で抱える。近付けた膝頭を優しく噛んで、そのまま足先へと口付けを数回。柔軟な体は従順で、やがて僕は顔のすぐ横まで伸びてきたアキレス腱に、骨付き肉でもしゃぶるみたいに歯を立てる。夏子が小さく笑声を漏らした。いつしか足は大きく開かれていて、根本の光景も露わになっている。僅かに色濃い厚めの膨らみと、その割れ目に覗く綺麗な薄紅色は、すでに芳潤な滴によりてらと艶めいていた。

「：もう、濡れてるんだ」

わざと分かりきった質問をする。「最初の頃に比べて、ずいぶんと感じやすくなってきたんだね」。

夏子は頬の色を深めながら、「だって：」とか細い声を出してきた。

僕はそれを遮って笑いかけた。「良いじゃない。それだけ、気持ちよくなりやすくなってるって事だよ」。

最早、夏子には返す言葉もないらしかった。少しでも照れを隠そうとしているのか、かすかに拗ねた表情で睨んでくる様子は、とても可愛らしいものだった。

だから僕は微笑んだ。そして手を、彼女の下腹部…：の前に、一度だけ首筋へと持つていく。優しく顎から頬へと撫で上げてやると、安心してくれたのか、彼女はゆっくりと目を瞑った。僕は彼女の髪に触れ、手を離れた。もう、そこは隠されていなかった。

そっと、いたわりを込めて、そこに触れる。と言っても、いきなり直接にではなく、まずは周囲からゆっくりと。不要に焦らすつもりはないが、下手に急ぐはずもない。指が軽く脇にあるツボを刺激すると、夏子は僅かに腰をくねらせたが、逃げる素振りは見せなかった。

：密かに、安堵した。初めの頃、夏子は臆やその付近に触れられそうになると、必ずと

言っているほど眉根を寄せて、腰を引いた。それは確かに、一瞬の反応で、また本人でさえ気付いていないだろう仕草であったけれど、僕は直感的に悟ってしまった。どんな体験をさせられてきたのか詳しい経緯は知らずとも、「セックスをあまり好きでない」と語った夏子の過去を、少なくともその一端を改めて思い知らされた気がした。

とは言え、今の僕のやるべき事など結局は一つだけしかない。つまり、彼女に快樂を与える事だ。どんな趣味・嗜好を持っていて、どういう傷を抱えていたとしても、関係なく。

規則的なリズムの中に挟まれる不規則な動きに、彼女の喘ぎも調子を変えて大きくなっていく。僕はそれを脳の中に置きながら、自分だけでなく彼女の全身にまで意識を伸ばす。あらゆる感覚が研ぎ澄まされ、触れ合っている全ての箇所が多くの情報を与えてくれる。だから僕はもっと沢山それらを集める為に、より激しく、もっと大胆に、さらに複雑に、だけど何より丁寧に彼女を攻める。それは彼女の内側に口を付け、はたまた邪魔な皮膚に覆われた真実を露出させ、さらには中へと潜り込んでいく頃に至っても、変わりなく。それどころかむしろ、与える刺激が強くなる分、一層に正確な状況の認識を必要とする。

と、やがて忍耐の限界を迎えつつあるのか、部屋に満ちる嬌声がそれまで以上に大きさと艶っぽさを増していく。何とか抵抗しようとして首を左右に振ろうとも、体は隠しようもないほど育った欲望に吞まれて勝手な動きを見せ始める。僕は彼女の本能が欲するままに、理性の檻から一本ずつ常識の柵を引き抜いて、何処か遠くに放り投げてやる。

そうしていよいよ彼女の声が悲鳴じみていく。

だが、そこで不意に気付く。背筋をのけぞらせ、晒されている細い喉の奥に、それでもまだ叫びを押し殺そうとする「何か」があった。

だから僕は右手の動きは微塵もゆるめず、反面、左腕を彼女の背に回し、とても優しく抱き起こした。それから左腕に力を込めて、穏やかな声で耳元に囁く。「大丈夫だよ」と。瞬間、苦しそうに悶える表情に、ほんのかすかに別の色がにじんだ。

「大丈夫、恐くないから。僕が付いているから」。安心させる為に抱き締め、キスをす。激しさとは無縁の、とても儂いキスをする。

途端、夏子は僕の背中に両腕をきつく回してきて――。

直後、ひときわ盛大に声を上げた。折れそうなほどに背筋をのけぞらせ、だけど決して離れぬように僕の体に爪を食い込ませ、全身を小刻みに痙攣させる彼女。僕はやはり右手だけは動かしたまま、そんな彼女をきつく抱く。すると、やがて肺の中の空気を絞り尽くした夏子は、次の瞬間、いきなり全身を脱力させた。僕の左腕一本に、だらんとした彼女の重さが集中する。

呼吸の仕方さえ忘れたように、乱れきった息づかいをする夏子を、僕は今度こそ両方の腕を使ってしっかりと抱き締める。寝かせるのではなく、全身で彼女を受け止める。どちらのものかも分からない汗が、互いの密着感を否応なしに高めてくれる。

しばらくの間、部屋には絶頂の余韻だけが響き、穏やかな時が流れた。

と、不意に夏子が目を開け、それから子供みたいにあどけない顔で微笑んできた。

僕もまた笑みを返して、「大丈夫？」と聞いた。

すると、それは少なからず強がりに聞こえる声音であったけれど、夏子は健気にも「うん、大丈夫」と言ってきた。

だから僕は、それに安心した風に「良かった」と微笑みながら、同時に、つまりはまだ

まだ余裕があるという証拠だなど、きわめて冷徹に判断した。なぜなら、これは温かい幸福に満ちた、互いの愛を確認し合う行為ではないのだから。真に必要なのは、痛みや辛さだけでなく、いつそ愛情や自我さえ忘れてしまえるほどの快樂なのだ。現に、その為にこそ僕は「買われた」のだから。

だとすれば、僕のすべき事など明らかだ。本能的に拒否感を覚える強制的な快感など、単なる苦痛でしかないけれど。理性的な思考回路を麻痺させるくらいの快感は、つまりこれこそが純粹な「快樂」なのだから。

僕は、ようやく、準備が整った事を悟った。

「じゃあ、これからがいよいよ本番だね」

そして僕は、「え」と表情を固めた彼女の返答を待つ事もなく、その身をシーツの上に寝かせ、先ほどまでよりも遙かに柔らかくなった膣内へと再び右手の指を挿入した。夏子は驚き、慌てた様子で何かを言おうとしたが、構わなかった。と言うよりも、そんな余裕を取り戻させる暇を与えるはずが無かった。「夏子は、いやらしい子だなあ」。のんきな口調とは裏腹に、溢れるほどに濡れた体内を、手首から先を使って猛烈にかき回す。内側だけに限らず、その周囲まで含めて、何処をどう刺激してやれば、この日の彼女が最も感じてくれるのか、すでに調査済だった。

あつという間に勢いを取り戻す嬌声の嵐。時折、そこに見え隠れしていた抵抗も、すぐに消えて無くなってしまふ。

腕を固定して、五指全ての先端にまで意識を込める。初めて彼女と過ごした夜こそは錆び付いていた筋肉も、今では限界を訴える事もなく思い通りに働いてくれる。彼女の喉が激しく鳴くにつれ、集中力は増していく。そうして僕は、決して乱暴にならぬよう気を配りながら、口腔内と言わず、胸と言わず、髪の中から足の指まで、体の前面も裏面も、中も外も、彼女の全てを我が身によって包んでやる。

ちやんと息を吸えているのか心配になるくらい、間断なく生み出される叫び声。肉がえぐられて血だらけになっているのではないかと思えるほどに、深く肩に食い込んでくる爪。電流刑さながらに出鱈目に跳ねる体を、力強く抱き、彼女の熱さと鼓動を確かめる。鼻腔を通って体の奥にまで、彼女の匂いが届いてくる。

と、その瞬間だった。夏子の腰が高く浮き、絶叫が部屋全体に木霊した。

そして、その残響が僕の耳から消え去るよりも僅かに早く、夏子の体が演目の途中で糸を切られた操り人形のごとく力を失ってがくと落ちた。失神こそしていなかったものの、最早、その姿は本当に壊れた人形じみて見えた。ただし、触れている肌には伝わる鼓動は、確かに命を証明していた。

僕は、「……とりあえず、今夜は此処までだな」と、心の中で呟いた。これで、夏子との行為は五回を終えた。徐々に呼吸が落ち着いていくのを確認した僕は、いつもと同じようにトランクスの端でそっと指をぬぐう。と言っても、その布だってもうすでに互いの汗で変色していたけれど。やはり今夜も、一線を越える事はなかった。

頭を撫で、体を冷やさないとシーツを掛けてやる。それから僕は、「夏子にはまだ、これ以上の快感は耐えられないだろうから」と、言い訳じみた理由を脳内にぼんやりと浮かべた。

いや、実際問題として、普通の素人の女性である、それどころかむしろ同年代の女性よ

りも少なからず性的に未熟だとさえ言えるかも知れない夏子には、確かにこれ以上の激しい行為はまだまだ逆効果になる恐れがある。だからこそ、彼女にもちゃんとその旨を告げ、代わりに現時点で最高度の満足感を与える事を約束しているのだ。事実、初めこそ僅かに戸惑っていた彼女自身も、すぐにそのことを体で理解したのか、僕の提案を受け入れてくれた。

：そんなもの、所詮は単なる言い訳に過ぎないのに。

そうだ。本当の理由など、いっそ失笑してしまえばいいようになるほどに滑稽で、単純で、何より惨めで、おそらくはとても侮辱的なものなのだ。

それはつまり、「勃たなかった」というだけの話なのだから。

僕は、夏子が快感の余韻に意識を捕らわれているのを良い事に、紛れもなく自嘲の笑みに頬を歪める。偉そうなご託を並べた所で、結局は欠陥商品と知りながら売りつける詐欺と変わらないのだ。あまりと言えば救いがたい己の卑屈さに、嘔吐感さえ湧いてきた。彼女との行為を終えた後はいつもこうだった。

勿論、僕はちゃんと真実を理解してもいた。当然ながら、夏子に魅力がなかったわけでは、決してない。僕自身の六年間にも及ぶブランクなど、関係ない。これがただの「売買契約」である事なんて、問題にさえならない。そう、仮にもう六年間も一度として女性を抱いておらず、久しぶりの客が欠片の魅力も持っていない人間で、それを単なる商売だからと割り切って行っていたとしても。

：きつと僕は、夏子以外の女が相手であったならば、平然と全てを成せていただろう。

それはまさしく、女性が自慰行為に用いるバイブレーターのごとく。いや、それよりも遙かに優秀な性処理用人形として。最早、頭だけでなく体の隅々にまで刷り込まれた技術だけを残し、他でもない自分自身が必要最低限以外の全てを忘れて、ただただ行為に没頭出来たはずなのだ。

正直に言えば、こんなことは初めてだった。本当に、あの夜に店で自らを「商品」として紹介した時には、一瞬たりとも予想していなかった。

だけど現実には厳然たる事実として、そこに在る。

そしてそれは同時に、一つの真実を突きつけてくる。それは僕にとって、まるで信じられそうにないものであったけれど、だからといって容易く無視してしまうにはあまりにも喜ばしいだろうもので。

「：どうしたの」

と、不意に夏子が僕の名を呼び、僕はそれまでの思考を即座に破棄する。「何でもないよ」。

すると彼女は特に気付いた風もなく、ゆるゆると微笑みながら「：ギョツて、して」と腕を伸ばしてきた。

「良いよ、ほら」

軽く手を引いて体を起こしてやり、そのまま両腕で優しく抱き締める。「：もうちよつとだけ、こうしててくれる？」。夏子は僕に全身を預け、幼子みたいに甘えた声を出してくる。僕は勿論、「君が望む通りにすれば良いんだよ」と頷いた。細められ、こちらへと真つ直ぐに向けられた眼差しを、正面から見つめ返しながら。

「だって、その為に僕は、君に『買われた』んだから」

「…うん。そうだね」

静かな微笑の中に浮かぶ、潤んだ瞳に映る姿。

「うん、そうだよ」

そいつはちゃんと、笑えていた。

5

「あなたとだったら、幸せになれるかしら」

夏子が唐突にそんな事を言ってきたのは、ちようど二時間ほど前に六回目の「行為」を終えていた頃。いつも通り、快楽の余韻に導かれるように僕の腕の中で静かに眠りに就いた彼女を見届けてから、シャワーを浴びて出てきた、丁度その時だった。

「起きてたんだ」

「…うん」

トランクス一枚という格好の僕は、軽く髪の毛の水気を手で払うと、とりあえず何も聞こえていなかったふりをしながら気安い口調で話し掛けた。「明日も仕事だろ。なら、ちゃんと寝てた方がよいよ」。

「あなただって、そうじゃない」。裸体にシーツを巻き付け、ベッドの上で上半身だけを起こした夏子は、即座にそんな返事をしてきた。

「でも、僕は夜からだし。君は違うだろ」

「…良いの。今は、起きていきたいの」

どうも、様子がおかしい。僕はそう悟ると、「まあ、たまには良いかもね」と笑って応えた。

「ねえ、こっちに来てよ」と、夏子が自分の隣を指さしてくる。

僕はそれに頷きながらもこう答えた。「ああ、ちよつと待って。今、髪を拭くから」。すると夏子は「良いから、早く。ほら、これで良いでしょ」と、枕元の明かり台の上に置きっぱなしにされてあった、少し大きめのフェイス・タオルを投げてきた。

「ああ、まあ…」

反射的にそれを掴んだ僕は、僅かに呆然としたものの、やがてそれで頭を拭きながら素直にベッドの縁に腰を下ろした。

「…どうしたのさ」

「そんなので目隠しなんて、ちよつと変態っぽかったわよね」

「え？」

まるで噛み合わない返答をしてくる夏子の態度に、少なからず戸惑ってしまう。

けれど夏子は、仄かに頬を朱に染めている以外は、至って平然としていて。だから僕もまた、すぐに「まあね」と軽く返した。「柔らかいし、細長いし、何処にでもあるものだ

し、便利なんだよ。それに、目が見えないと、色々想像出来て楽しいだろ」。

夏子は「：確かに、そうね」と、その時の事を思い出したのか、さらに顔を赤くした。僕はそれに「なら、良いじゃない」とのんきに首肯する。かすかに拗ねたような表情になった夏子は、けれど何も否定してこなかった。僕は「はは」と声に出して笑った。

首にタオルを巻いたまま、完全にベッドに上がって夏子に寄り添う。会話も音楽もない部屋は、とても静かだったけれど、寂しくはなかった。それはきつと、たまにはこんな時間もあると、ぼんやりとした頭で考えてしまえる程度には価値のあるだろうものだった。だから僕にはそれを壊してしまう理由なんて一つも無かった。だけど…。

「：ねえ」

不意に夏子が上げた声により、静穏はいとも容易く終わりを告げられた。

「どうしたの」

彼女の方を向くと、夏子はしばらくだけ間を置いた後、こちらを見ずに言ってきた。「あなたとのセックスって、最高。本当に、これまでのどんな男よりも上手よ」と。

僕は言葉を失った。

「：嬉しく、ないの？」

と、急に黙り込んだ僕に不安を抱いたのか、夏子がようやくこちらを向いた。その瞳がいつも以上に弱々しく見えて、僕は即座に言葉を紡いだ。おそらく、彼女が考え、そして望んだのであろうままだ。

「勿論、嬉しいよ」。穏やかに微笑みながら「光栄だね」と吐き出した。嬉しくなれるわけがなかった。

誰を何人抱いたかとか、どんな相手だったかとか。どれだけの技術を駆使し、また使わせたかとか。もっと端的にイかせたかどうかとか。そんな低俗な自尊心を満たす事ばかりに血道を上げ、それこそが男としての価値だとも言わんばかりに競い合い、その成果を誇らしげに語る、愚かで未熟な連中ガキとは違う。少しでも好きな相手に、他人と比べられて、そんな彼女が見知らぬ男に抱かれている場面を連想させられて、しかもそれを他の誰でもない彼女自身の口から聞かされて、嬉しいだなんて欠片ほども思えるはずがなかった。

そう、僕はもう自覚している、してしまっている。自分が、きつと間違はなく、理性が考えているよりも遙かに強く、彼女に惹かれていたのだという事を。

独占欲と言えば、そうなのかも知れない。それこそ下らないガキの嫉妬だと言われれば、正しいのだろう。今さら、己を棚上げて何を言っているのだと呆れられても、否定する気など無い。全くもってその通りだ。

だけど、だからこそ、僕はそんな彼女自身の言動に対して怒りを覚えたわけでも、そんな話に登場する「男達」に対して恨みを抱いたわけでも決してないのだ。

ただ、ほんの少しばかり、虚しかっただけで。

「良かった、喜んでくれて。いつか、ちゃんと感想を言わなくちゃって、ずっと思ってたから」

「はは。うん、ありがとう」

仮面が、剥がれそうになった。だから僕は懸命に、自分の方こそ嬉しそうに笑う夏子の瞳を見つめた。そこにいる、「彼女の望み通りの僕」を再確認する為。

やはり、そいつはきちんと笑っていた。

「…だから、さ」

と、そこで急に、夏子が口調を変えて、言ってきた。「あなたとなら、幸せになれるかしら」。

僕には何も言い返せなかった。

「さつきも、本当はちゃんと聞こえていたんでしょ」。夏子の顔は、相変わらず微笑みの形で固定されていた。だがそれは、確かに数瞬前までのものと同様でこそあったけれど、絶対に同一ではなかった。

だからこそ、僕は…。

「どうしたのさ。何か、あったの」

それが最も卑怯なやり口だと知っていないながら、否定も肯定もせず、曖昧な答ですらない、問いかけを返した。それも、心配している風を装って。

「…：うん。ちよつと、ね」

夏子は、そんな僕を責めるでも、さらに答を要求してくるでもなく、ただかすかに寂しそうに呟いた。

そしてそのまま、口を閉ざして視線を逸らす夏子。僕は、ぼんやりと艶やかな髪の毛の動きを目で追いながら、意識の隅で冷静な自分が吐き出す答を聞いていた。

無理だよ、と。君は錯覚しているだけさ、と。そう語る声は、冷酷なまでに淡々としていた。

単純な話だった。僕達の関係は、あくまで文字通りの「肉体関係」のみでしかないのだから。それは純然たる快樂の追求で、完然なる悅樂の欲求で、いっそ厳然なまでに肉体的な行為でしかない。そこには愛どころか、それに付随する精神的要素の断片でさえ入る余地など無い。少なくとも、その最中には、そんな内容を考えていられる余裕など無い。そもそも考えさせる余裕など与えない。

必要なのは、本能を解放する絶対の絶頂だけだ。

だとすればこそ、彼女が、こんな僕と「幸せ」になんて、なれるはずがない。

それは決して癒しじゃない。それは単なる慰めなのだ。だからこそ、それは辛苦を忘れさせてくれたとしても、幸福を与えてくれるものではない。それは何一つとして埋めてくれはしないのだ。代わりに、ほんの束の間だけ消し去ってくれるだけだ。痛みも、哀しみも、寂しさも、悔しさも、はたまた虚しさや、いっそそれらを感じる意識も。つまりは、幸せであつてさえも。

それにもつと分かりやすく、最も重大な事実として。僕には、彼女と共に幸せを築き上げていく為の術なんて、無いのだ。と言うか、自分自身の為だけですら、どうすればそんな便利な代物を手に入れられるのか知らないのだから。いや、それ以前に、「幸せ」と言うものの正体を、僕は理想こそすれ、理解などしていないのだから。

僕に出来る事なんて、都合の良い幻想を夢想し、適当な空想で幸福の形を勝手に描く事くらいでしかなく。現実逃避という名の妄想をオカズに、一日中、自慰に耽っているくせに、いざとなったら現実の女の一人さえ抱けない童貞オタク。僕はきつと、本質的にはそれと何ら変わらないのだ。…事実、僕はやはり今も尚、夏子に対して勃たないのだし。

「…もしかしたら、だけど」

「うん」

「私、もう、あなたに……。少なくとも、こんな風には、会えなくなるかも知れない……」
夏子の告白は突然だったけれど、驚きはあまり湧いてこなかった。だって、最初から、いつかはそうなるだろうと分かっていたのだから。こんな時間を永遠に続けられるはずがない。

すると夏子は、そんな僕の思考を悟ったのか、「理由、聞かないの？」と何となく寂しそうな口調で聞いてきた。

だから僕は静かに応えた。「僕が聞いて良い理由なのかい」と。

果たして夏子は答えなかった。それでも、僕にはもうある程度の予想が付いていた。

金の問題……では、きつと無かった。彼女の貯金が尽きて、僕を買う事が出来なくなつたと言うわけではないのだろう。勿論、その残高など知らないし、仮に借金があったとしても僕には分からない。けれど、そうじゃないだろう事だけは確信出来た。

簡単な推理だ。例えば、そもそも僕は夏子に対して、「幾ら支払え」と言う厳密な金額提示をしていない。言い換えれば、彼女はたった一円でだって、僕を買う事が可能なのだ。なぜなら、重要なのは金額の大小でなく、「夏子が僕を金で買っている」と言う事実だけでしかないのだから。他の誰でもない夏子自身に、「この行為は単なる通信販売と同じでしかなく、この男は商品に過ぎないのだ」と思い込ませてしまえるなら、僕には一円も一億円も変わらない。そしてきつと、夏子だってそれをきちんと理解しているのだろう。だからこそ、毎回「二十万円」なんて現実的でありながら決して安くはない金を持つてくるのだ。おそらく彼女にとって、それを完全に割り切る為には、それほど額の必要なのだろう。だからこそ、僕もまたそれを渡されるがまま受け取っているのだから。果てしなく馬鹿馬鹿しく、限りなく愚かしい契約であったとしても、それが存在して初めて僕達は繋がるのだ。最初から最後まで、余計な感情を無視して。

それにもっと明らかな根拠として、僕は、一度でも溺れた女は、金のあるなし程度じゃそれから抜け出せないと言う現実を知っていた。

僕は学者でないし、それどころかまともに学校さえ出ていないのだから、男女間に置ける「性欲の強さの差」と言うものが一体どれほどのものかなんて、生物学的な内容は知らないし、知りたくもない。

だけど、一つだけ確信を持って言える事はある。「男は快樂セックスにはまり、女は快樂セックスに溺れる」。それだけはきつと、間違いない。

男も女も、健康で健康である限り、全てとは言わないが、その大半が、多少なりと性的な事柄に対して興味を持ち、時にはそれを求めようとする。当然だ。だってそれは本能的な事なのだから。理想通りの魅力的な異性（もしくは限定的に同性）がいれば、その相手に対して性的な興奮を覚えるのも、自然な事だ。

だが、男女の間で決定的に違う箇所があるのも確かだ。それは、それぞれの性が許容出来る「快感の強度」とでも言えるものだ。

元々、雄に比べて雌の方が痛みに強い生物らしい。それはもしかしたら、出産という、僕なんかには到底想像も出来ない激痛に耐える為に、遺伝子の中ですでに決定されている事なのかも知れない。違うかも知れないが。

しかし何にせよ、確かに僕の経験上、女の方が男よりも痛みに強い。勿論、それは成長や環境に伴う個体差によっても違ってくるし、普通の人よりも酷く痛がりだという女性も

いる。だがそれでも、全く同じ行為によって、同等の痛みを与えられた時、やせ我慢の有無や、自尊心の強弱などを無視して、ただただ単純に「精神的にどこまで耐えられるか」ということを比べた場合、それは大体にして女の方が良く長く保つのだ。もっと端的に、かつ極論すれば、女は―あくまで物理的かつ肉体的な―凄惨な激痛に対して、ひたすらに泣きわめいて止めてくれと懇願する。それに対し男は、限界を超えた途端、早々に泡を吹いて気絶するのだ。

そしてまたこれは同時に、「女の方が、男よりも強烈な快感を得られる」という性質をも示している。なぜならば、詰まる所、痛みも快感も、共に単なる刺激でしかないからだ。その刺激の質、強弱、それを受容する場所、状況、そんなものによって、それが「痛み」なのか「快感」なのかに変わるだけで。だからこそ、女が許容しうる快感の強さは、射精すれば終わりの男の比ではないし。真に最高の快楽を覚えた女は、男よりも遙かにそれに対し従順になる。事実、ゲイや一部の男達の間で行われる、肛門から指や器具、男性器を挿入して前立腺の裏側辺りへの刺激。それにより得られる、通常では得難い強烈な快感は、ある意味では女性のそれに近いらしく、一度知れば病みつきになる者も多い。とは言え、それも所詮、女の真似事の一つに過ぎないのだ。

だけど、そうであるとすればもう、全てを忘れさせる強烈な快楽、しかしそれさえも忘れさせる事の出来るものなど、たった一つしかない。それはすなわち…。

「誰か、好きな男でも出来た？」

僕には与えられないもの。全てを忘れたいと思う気持ち、それ自体を優しく包み込んで、忘れさせてくれるもの。もっと気取った言い方をすれば、「愛」と言う名の感情。

「……………」

夏子は、僕の問いかけに即答しなかった。

ただ僕には、この無言の返事が、おそらく否定でないのだと分かっていた。例え、今はまだ完全なる肯定でなかったとしても。少なくとも、心に迷いが生じて、想いが揺れる程度には。

「…今、さ。会社で一人、私に『好きだ』って言うてきてる人が、いるんだ」

そして夏子はそんな気持ちをも、そのまま声に変えて告白してくる。それはまるで、果てしない海上でたった一人、溺れそうになりながらも、安物の浮き輪に必死にしがみつき、そのまま沈まずとも流されていく少女のように。

「うん」

だから僕は、それに軽く相槌を打った後、「良いことじゃない」。本当に自然に、祝福するよという微笑みを浮かべた。ただし、やはり彼女はそれを見てなどいなかったけれど。

「…本当に、そう思ってる？」

夏子は視線の代わりに、そんな問いかけを向けてきた。

僕はそれに、即答した。「うん、勿論」と。

夏子はそれに、沈黙した。

「まだ、怖い？」

だから僕は、そんな事を聞いた。

すると夏子は、この時になってようやく、僕の方に視線を向けてきた。

「…どういう意味？」

「だからさ。まだ、『前みたいに傷つくかも知れない』って、思って、怖い？」
「そんな事は…ない、よ…」

しかし、そんな眼差しも力無く伏せられ。再び僕は、「己のあるべき姿」を見失いそうになる。

「聞いても良いかな」。そこで僕は、言葉を吐き出す事で他の思考を誤魔化した。

「…うん」

「どんな人なの」

「…：優しい人、かな」

「へえ」

「私がこれまで付き合ってきた男とかとは、全然、タイプの違う…。ちよつと、物足りない感じもするけど、でも、『あ、この人って優しいんだ』って、分かるような人…」

やがて、徐々にだが、夏子の口も流暢に言葉を生み出し始める。どうやら彼女もまた僕と同様に、そうする事で束の間でも楽になるうとしていたみたいだった。

「一っ年上なんだけど、あんまり、そんな事とか気にならない感じ。でも、それってその人が女の扱いに慣れてるとか、そう言うのじゃ全然なくて…。何て言うか、その、良い意味で空気のような人。兄妹とか、そんなのに近いんだけど、それとも少し違う。本当に、『無理しなくても良いんだ』って思わせてくれて…。：自分が、自然にいられる、人」

僕は彼女の独白を、「うん、うん」と何度も頷きながら、聞いていた。直感的に、その言葉は真実を語っているのだと確信していた。

夏子はそんな僕を見返しながら、「…それから」と、さらに言葉を続けてきた。

「ありのままの自分を見せられて、素直に弱い所とかも吐き出せて…。：それ以前に、『それをしても大丈夫なんだ』って、思わせてくれる、人」

「うん」

「私が必死になって追いつこうとしなくても、そのままの私を受け止めてくれる人」

「うん」

「きつと、私が間違っていたり、不安になってたら、ちゃんと何かを言ってくれらるんだろうけど。でも、そうでない限り、いつも笑って私の想いを聞いてくれるような、そんな人」

「うん」

「そんな、人なの…」

「うん」

「…本当に、優しいの」

「うん」

「……………」

けれど、いつしかだんだんと弱くなっていた夏子の声は、そこに来て完全に止まってしまった。

だから僕もまた、黙って彼女の言葉を待つ。

すると夏子は、さらに数秒間、口を閉ざした後で。

「…本当に、分からないの？」

そう言ってきた。今度は、彼女は目を逸らさなかった。

僕もまた、彼女の眼差しを見つめ返した。そしてそれに向かって微笑みながら、こう言

った。「何がだい？」。

瞬間、その中にいた「僕」が、歪んで消えた。ただしそれは、僕が何かをしたからというわけではなく。ただ、夏子が眉間にしわを寄せ、強く目を閉じたからだだった。

僕はやはり待った。僕を含めた何もかもを拒絶しようとする風な様子に、どんな類の声も掛けることなく、ひたすら待った。

「……何で……よ」

と、やがて夏子は、瞳の代わりにゆっくりと唇を開き、声を発してきた。…その声が震えている理由を、僕は敢えて考えない事にした。

「何で、何で何も言わないのよ」

「夏子……」

「一言で良いのよ。たった一言、それだけで良いのにつ……」

「………」

「どうしてよ……。本当に、どうして……」

僕は、またしても急に声を殺した夏子を眺めながら、考えていた。その問いに対する答を、だ。そしてそれは、いとも容易く見つかった。要するに、僕の中には肝心の一言を捧げる為の資格が無いのだ。

「夏子……」

「………」

だけど、何かを言わなければ、もう夏子は一言も返してくれなさそうだった。

潮時なのかも知れない、そう思った。

そこで僕は、それがどれだけ残酷な仕打ちなのかを理解しながらも、「大丈夫だよ」と、それを口にする事にした。多少の不安はあったし、罪悪感なんて凄まじかったけれど。それでも、先ほど語られた真実が、彼女にそれだけの安らぎを与えられるだろう男の存在が、僕にとつての卑屈な免罪符となってくれた。

「そんなに心配しないで」

「真吾……」

「僕は、君の体の事なら、ちゃんと分かっているつもりだからさ」

「何、言って……」

僕は、突然の言葉に呆然とした表情を浮かべる夏子を残し、静かにベッドを下りて、隣の部屋へ行き。

「だからもし、君がまた傷ついてても。その時はまた、全てを忘れさせて上げるから」

やがて封筒を一つ手に取って戻ってきて、ベッドの脇に立ったままそう言った。

「なっ……」

その瞬間に夏子の顔に浮かんだ、驚愕と言うよりも最早驚怖と呼んだ方が良さそうな感情を、僕はきつと忘れられないだろうと確信した。同時に、決して忘れてはならないと悟った。こんな封筒の中身など、それを赦してくれる免罪符になろうはずもない。

「確かに、今日もちゃんと『二十万』入ってるね」

僕は初めて、彼女の眼前で、その中身を確認する風に万札を数え、彼女自身に全てを思い出させる為はその姿を見せつけてから、こう言った。「だからさ、君の好きにすれば良いんだよ。その男と付き合うも、付き合わないも。その男を信じるも、信じないも」。

「……………」
「そんなに深く考えなくて良いんだよ。だって、君はまたいつでも、君が望むままに、僕を買えば良いんだから」

「……………」
凍りついたような表情で夏子は、ひらひらと扇状に広げた万札を振る僕を見ていた。僕はそんな彼女の前で、凍りつかせたみたいに、表情を「微笑み」で固めていた。僕達はずっと見つめ合っていた。言葉など要らない。これ以上、言葉など吐き出せない。だからもう、言うべきことなどない。唯一絶対の一言などとは違いすぎただろうけれど。それを十分に上回る程度には言葉も並べたはずだ。だから、もう…。

「…そうね、あなたの言う通りだよ」
と、夏子が不意に静かな表情で声を発し、「…もう、寝るわ。明日も仕事があるし」と言ってきた。それからベッドの中に潜り込み、シーツを頭まで被る。

僕はと言えば、ずっと突っ立ったまま、視界から彼女が消えるのを見送る事しか出来ず。しばらくしてようやく紡げた内容さえも、「…おやすみ」と言う、そんな短いものだけで。果たして、本当にもう眠ってしまったのか。それ以上、どれだけ僕がそこに立ち尽くしていようとも、最早、夏子からの声は二度と聞こえてこなかった。

6

世界なんてクソだと思っていた。

○

初めてのキスがいつだったのか。そんな事、本気で覚えちゃいない。僕が覚えているのは、「傷ついて泣いている女の人は、キスで慰めて上げられる」という事を教えられたのが、まだ名前すら漢字で書けない頃だったって事だけだ。

母は綺麗な女性だった。僕はマザコンではないし、それどころかむしろきつと母を嫌いなのだろうが。それでも、きわめて客観的な意見として、母は綺麗な女性だった。そしておそらくはそれ以上に、寂しい人だった。また同時に、自らこそを愛している人だった。だからこそ、母はずっと新しい恋人に困らなかつたし、それなのに常に自分の手の届く所に僕を置いていたし、結局いつも最後には虚しくなつた男に去られていた。

そうして母は、そんな自身を慰める為の「もの」として、僕を創り上げたのだ。なぜなら僕は、母の愛玩動物だったのだから。

確かに、僕を最初に「愛した」のは、他の誰でもなく、母だった。僕にはそんな愛など要らなかったのに。

母の教えはいつも適当で、だけどの確だった。なぜなら母は、細かい事など何一つ指示しないくせに、自らの思う通りに、望む通りに、願う通りに、僕が彼女を慰めなければ：泣いたのだから。怒って罵声を浴びせるでもなく。感情のままに殴るでもなく。ただただ涙をこぼしながら嗚咽を漏らし、責めるような眼差しで僕を苛んだ。いつまでも、いつまでも、僕に逃げる事さえ、目を逸らす事さえ、許さずに。

しかし、だ。何より馬鹿馬鹿しく、酷く無惨な話なのだろうけれど、それでも僕は、母に「愛されたい」と思っていた。そんな「愛」なんて、何処にも有りはしなかったのに。幸せでいたかった。何が「幸せ」なのか、ろくに分かつちやいなかつた。普通でいたかった。特別な事など無くても良いから、穏やかにいたかった。母の傍でいたかった。それこそがつまり、普通で、幸せな生活なのだと思ひ込みたかった。だからこそ心が、痛かった。

そしてその痛みは、僕に「それはまだ自分が未熟なせいだからだ」という強迫観念にも似た罪悪感を突きつけてきた。

僕は、必死だった。母に捨てられたくなかつたから。母の傍にいられる理由を失いたくなかつたから。

僕は必死で母の「愛」を学んだし、母の「愛」を受け入れた。例えそれが、他者から見れば不幸と言っても差し支えない程度には哀れな愚考で、一般から見れば異常と言っても問題ない程度には歪んだ愚行であつたとしても。

愚かな矛盾など気にもならないくらいには、それを正しい事と信じていた。

そうだ、だから考えようによっては、そんな自分達だけの「普通」の中で、必要な時だけであつたとしても母に呼ばればその傍にいられて、僕はきつと「幸せ」だつたのだ。

母が、僕を残して死ぬまでは、ずっと。

本当に、いっそ滑稽なほどに呆気なく、母は死に。僕の世界には穴が開いた。それはもう、世界そのものがそこに呑み込まれ消滅するのだと信じられるほどに、大きかつた。

だけど、それはやはり詰まる所、僕の消滅にまでは至らなかつたのだ。そしてまた僕には、そんな穴を埋めようとしてくるものがあつた、僕の意思など無視して。借金だつた。

酔って歩道橋の上から飛び降り、さらに車に撥ねられた母が生前、僕の知らぬ間に作っていたらしい借金は、結構な金額だつた。けれど、当然ながら、僕にそれを返せるだけの力は無かつた。父親など知らない僕にとっての財産は、全て母が遺してくれたものだし、それこそがつまり借金だつたのだから。

だが、同時にもう一つだけ、母の遺してくれたものがあつた。それは僕だつた。そして僕は、母が死ぬ前、最後に付き合っていた相手であり、また怪しい店で水商売をしていた母の客でもあつた男に連れられるまま、その世界に足を踏み入れた。

非合法的な売春クラブ。そこでは、様々な理由によって集められた人間が、それぞれの方法で己を売っていた。男も、女も、大人も、子供も。事実、当時そこに入った頃、僕はまだ十二歳になつたばかりだつたが、僕よりもさらに幼い子供もいた。しかも、そんなものはむしろまだ可愛げのある方だつただろう。中にはもつと特殊な人間もいたのだから。例えば、僕よりも二つほど年上だつた少女には、生まれつき右の肘から先が無かつた。そう

いった人間にしか興奮しない性癖を持った人間がいる事を、僕はその時になって初めて知った。

そうして僕は、そんな同僚に囲まれながら、彼らと同様に自身を売っていった。僕は、主であった母の死をきっかけに、愛玩動物から商品に変わったのだ。

そこでの「売り方」は、人によって様々だった。ごくごく普通にセックスをする者。臆ではなく尻の穴を専門にする女。年下好きのゲイを相手にする少年。狂ったようなサド氣質の中年男に弄ばれる少女。中には己の吐瀉物や排泄物を「売り物」にする者もいたし、客のそれを食らう者もいた。

最早、何でも有りだった。享楽主義の客を満足させる為ならば、商品は何でもした。なぜなら、それこそが存在意義だったのだから。金と引き替えに、客に、客が理想とする快楽を与える道具。つまりそれが商品なのだから。

そして、そんな中で僕はと言えば、主に中年の女性を専門にする男娼となっていた。母の影響があつたのは間違ひなかつた。

それから僕は、もう覚えてさえもないほどの数の客に買われ。まともに思い出す気も起こらないほど多くの要求に自らを売った。ただ、一つだけ、少しばかり他の商品と異なっていたのは、僕の客となる女性が、主に「VIP」と呼ばれる連中の妻や、愛人、もしくはその人自身だったということだ。

だからこそ僕は徹底的に仕込まれた。ある意味では、VIPそのものを相手にしている商品よりも、さらに厳しく。それは正常なアブ・ノーマル——そもそも、そんな概念があつた場所にあつたとするれば、だが——行為から、異アブ・ノーマル常な行為まで。そこには、あくまでも愛玩動物として僕を許容してくれていた母の優しさ、いや、いっそ生易しさなど、全く及びもつかない徹底したルールがあつた。

金さえ払ってくれるならば、どんな相手でも皆等しく客だ。商品とは徹頭徹尾、そんな客に買われた「もの」である。自身の意思など「もの」には存在せず、だからこそ商品にもそんなものは認められない。快楽は客に与える為だけにあり、求めたり与えられたりするものではない。精神的な充足感、客が勝手に個人の私的な生活の中で得るものだ。商品はただ己を買ってもらう為に、相手を肉欲の虜にしてやるだけで良い。中途半端で拙い技術など、何も知らない素人よりも白けさせる。快楽に我を失った動物さながらに、ただだがむしろ腰を振るなど愚の骨頂だ。死にたいと思える暇があるのなら、死人になつたつもりで全てを受け入れろ。感情も理性も殺してしまえば、それはそれでまた別の「売り方」がある。

：本当に、非常識だ。だが、そんな非常識こそが、そこでは唯一の常識だった。意思の許されない僕達には、拒否する事さえ出来ないのだから。

そうして僕は、そこを辞めるまでのおよそ九年間、商品として自らを売る事になる。しかしながら、そこはやはり確かにプロだった。だから、母の借金分の金は、最初の数年でいとも簡単に稼ぐ事が出来ていた。それでも尚、そこに居続けた理由は、ただ単に「他にいくべき場所など何処にもなかったから」というものだった。

母を失った僕には、何も無かつた。だからこそ、死ぬ気もなかつた。だって死とは全ての放棄なのだ。喜びや楽しみを捨てる代わりに、苦しみや痛みもまとめて消去する。つまり無だ。けれど僕は、もうすでに無だったのだ。最早、改めて死ぬ必要さえ無かつた。い

っしか、生きている事を辛いと感じる事さえ、無くなっていた。

：だけど、そのはずだったのに、いつの頃からだったのだろう。それはおそらく今にして思えば、成長と共に客層が変化してきて、いつの間にか周りの商品も姿を変えていて、こんな無にさえ変化が、何よりきつと終わりがあるのだと悟り始めていた頃であったのだろう。

僕の中で、ほんの少しずつではあったけれど、一つの感情が芽生えつつあった。いや、それはもつと正確に言えば、思い出されていた。それは、まだ母が生きていた頃、幼かった自分が抱いていた想い。

幸せになりたい、というものではない。そんな高望みをするほど、僕はもう何も知らない子供ではなかった。

僕はただ、ふと「普通になりたい」と願ったのだ。今度こそ本当にありふれた普通に。それでどうなるのかなど、分からなかったし、幸せになれるとも思わなかった。だけどそれでも僕は、唐突に願ったのだ。同時に、自分みたいな無の中にさえ、そんな思いが残っていたのだと知って。その瞬間、本気でそれを望んでいたのだ。それは我ながら驚くほど、明瞭で、単純で、だからこそ強烈な思いだった。

僕は、もしかしたら生まれて初めて、純粹に自らの意思によって動く事を決意したのだ。すると変化は、絶対だと思いつ込んでいた虚構の消失は、いとも容易く叶えられた。そう、無そのものが、無くなったのだ。

やがて十八歳になった僕は、そこを辞める旨を告げた。それは確かに、そうそう簡単に、それこそ普通の高校生や大学生がちょっととしたバイトを辞める感覚で抜け出せるものではなかったけれど。しかし僕にとってその程度の困難さは、最早、問題にさえならなかった。

それから僕は、さらに二年間を商品として過ごし、己で稼ぎ、残していた金の大半を使って、自分自身を買い、のみならず義理立てとしてもう一年間、そこで働いた。

そうして遂に、二十一歳になった時、僕は自らを縛る全てのものを無くしてしまえたのだ。母に繋がれ、いつしか別の場所に繋がれ、必要な時にだけ引かれていた、鎖を。

……自由に、なったのだ。

果たして、自由に普通に生きてみる事は、想像していたよりも遙かに単純で、だからこそ厳しいものでもあった。だけど、それでも僕は、胸に湧いた想いに導かれるまま、生きてみる事にした。そうすれば、自分が一体どうなっていくのか、きつと知る事が出来ると信じられたから。

僕は心から、未来を見てみたいと想ったのだ。

○

世界なんてクソだと思っていた。要するに無価値だ。そしてそれは、己自身もまた。

勿論、中には心の綺麗な人もいるし、汚い人間ばかりだというわけではないだろう。

だけど、人は綺麗で澄んだ水の中に、濁った汚い水を流し込んだ時。果たしてそれを飲むもうと思うのか。

：飲まないだろう。よっぽど切羽詰まっていけない限り、そんなものを好んで飲むと飲むはずがない。つまりは所詮、そういうことなのだ。

それこそが、僕がずっと頭の片隅に置いていた、何よりも意味のない思考だった。僕はかつて、生きる為に自ら汚辱にまみれた。実際、生き続ける為にひたすら汚濁を飲み干した。だけれどもしかしたらそんな事は、もっと真剣に、ひたむきになっていれば、必要なかったのかも知れないと、今なら思える。所詮、僕の考えていた世界なんて、あの頃の未熟な僕に知る事の出来ていた程度の、そんな「全て」なのだ。

しかしまたその思いは、今となっても、厳密に言えば完全に消えて無くなったわけではない。勿論、今は決して、世界の全てが無価値だなんて思っていない。喩え、世界自体の評価が最低であったとしても。それでも、その中にあるものの全てが最低ばかりであるだなんて、思っていない。総じて言えば低劣なだけで、所々に目を凝らせば、抜群に素敵な事だっけと見えてくるのだから。

綺麗な水と、濁った水。どちらもあるにせよ、いや、仮に後者の方が多かったにせよ。だからといって、澄んだ水の清涼さまでも否定してしまう必要はないのだ。

ただ、問題は、僕自身が、そんな綺麗な水を注ぐ器としては、もうすでにあまりにも汚れてしまっているという事だ。

そう、僕はもうすでに汚れている。ごくごく普通の「普通」の世界の中では、あまりにも異質な存在。そして、そんな人間だからこそ、今さら取り繕うかのように綺麗な水を自らに注ぎ込んだとしても。それを誰かに、ましてや好きな相手に飲ませられる、はずがない。

もしも万が一、彼女を生かす為に、一時的にそんな水で喉を湿らせてやる事があったとしても。彼女を一生、そんなものの中に浸して良い、はずがない。

好きな相手には幸福を望むものだろう。大切な相手には平穏を願うものだろう。恐ろしく単純で、いつそ容赦ないほどに絶対で、しかし確かに正しいと信じられるそんな想いこそが、もしも真実の愛などと言うものとしたら。

：自らがそんなものとはかけ離れている事実を知りながら、その相手に「好きだ」などという一言を吐けるはずもない。それを知りながら紡がれる「愛している」など、きわめて卑劣な詐欺^{ペテン}以外の何物でもない。

だって現に、「相手の平穏な幸せを望む」と謳いながら、その相手を汚泥が広がる場所に引きずり込むなど、明らかに矛盾した行為だ。

足の裏が汚れる程度なら、構わない。洗えば済む話だ。その為の水は、完全無欠の清水などでなくても良い。

けれど、そんなものを飲ませるわけにはいかない。そんな汚泥に満ちた底なし沼に落とすような真似をして良いはずがない。

誰かを好きになるのに、資格など要らないのだろう。しかし、誰かに「好き」と伝える為には、無くてならないものもあるのだ。少なくとも、それが本当に真剣な気持ちであるとするのなら、絶対。

それなのに僕には、何も無い。僕にあるのは、商品だった頃の過去と。後は、ようやく手に入れられた、張りぼてのごとき「普通の日々」だけだ。

だとすれば、そんな僕に、彼女がほんの束の間でも期待しただろう一言を、伝えられる

はずがなかった。

7

「…久しぶりね」

「うん…。…元気だった？」

「…まあ、ね」

まるで親しい友人の通夜に訪れて、しかもその棺桶と遺影を前にして会っている時のごとき、暗く、単発的な会話。そんなものを僕が出し抜けに店に来た夏子と交わしたのは、最後に彼女と過ごした晩から、早くも二週間あまりが経過していた、ある日の夜だった。

その間、夏子はただの一度でさえ店に顔を見せなかったし、連絡もしてこなかった。僕もまた、ただの一度として連絡をしようとしなかった。いや、いつそのまま永遠に、彼女と会う事はないかも知れないとさえ、覚悟していた。だが…。

「…ねえ」

「どうしたの」

「少しだけ、話をしない？」

「え…」

本当に何の前触れもなく現れた、ジーンズとセーターの上からコートを羽織っただけという格好の夏子は、レジ・カウンターの向こうに立ち、しばらく躊躇う風な素振りを見せた後で、意を決したかのように、「出来れば、外で…。…二人だけで」と言ってきた。

「……………」

「ダメ、かな」

「いや…」

実のところ、僕は迷っていた。

秋も終わりがけ、外もだいぶと寒くなってきたせいか、まだ時刻は九時前だというのに、店内では相も変わらず静寂ばかりが居座っていて。店の奥では、先日にと二社の企業から書類選考の合格通知を受け取る事が出来たらしい松本くんが、しかし忙しくなるのはこれからだと、明日の社会人デビューの為に英気を養っていて。だけど、僕が迷ったのは、そもそもそんな事などが理由ではなくて。

すると、そんなこちらの沈黙をどう解釈したのか。不意に夏子が思い出したように口を開いた。

「あ、お金ならちゃんと」

瞬間、僕は考えるよりも先に即答していた。「要らないよ」と。

「え、でも…。…夏子はそれに、かすかに戸惑う様子を見せてきた。

だから僕は、再び即座にこう言った。「話をするのに、そんなものは要らないよ」。それ

から笑って、こう締めくくった。「だって、僕達、友達だろ」。

「しん……村瀬、くん」

驚きに見開かれる夏子の瞳。僕はそこに、本当に自然に笑えている自分を見た。

「……うん、そうだね」

「じゃあ、ちよつと待ってて。今、松本くんを起こして、ついでに着替えてくるから」
「うん」

そして僕は自らの言葉を実行する為に、さっさと店の奥へ行く。頭の中では、疑問と、かすかな困惑と、少なくとも嬉しいさが渦を巻いていた。けれど僕はあえて、その最後の感情を意識しない事にした。だって、そうでもしなければ、大切な想いさえ踏みこじる行動を取ってしまいそうだったから。

「ごめん、松本くん」

事務所兼休憩所になっている部屋で、パイプ椅子を縦に三つ並べ、それを寝台代わりに眠っていた松本くんを揺すって起こす。すると、数秒間ほどぼんやりした顔で寝惚け眼をこちらへ向けてきていた彼は、それでもやがて「……あれ。どうしたんすか」と応えてくれた。

僕は申し訳なきを抱きつつも、「ちよつと、悪いんだけどさ」と夏子が店に来ている事を説明し、「また少しだけ、出てきても良いかな」と問いかけた。

果たして完全に覚醒した松本くんは、僅かにからかいめいた笑みを口元に浮かべて、「ああ、良いっすよ」と言ってくれた。

「本当にありがとうね」

「村瀬さんにはいつも世話になってますから。……つつうか、あれですよね」
「何？」

「俺、村瀬さんって、ずっと奥手なタイプだって勝手に思ってたけど。実は結構、遊び人だったりしますよね」

「はは。まさか、そんなんじゃないよ」

僕は彼の言葉に苦笑を返し、首を横に振る。すると松本くんは、きよとんとした表情で「え、そうなんすか。でも……」と何かを言いかけてきた。

僕はそれを最後まで待たずに、「本当に違うから」とあっさり言った。「それに、今日はじきに戻ってくるから」。

「……はあ」

松本くんは、やつぱりちゃんとは分かっているさそうだったけれど、それでもそれ以上は何も言ってこなかった。だから僕は手早く上着を着替えてジャンパーを掴むと、「本当に悪いんだけど。じゃあ、お願いするね」とその場を後にした。

脳裏に蘇る夏子の顔を思いながら、おそらく松本くんに言った事は嘘にならないだろうと、冷静な部分が呟いていた。

どこかの店にでも入ろうかと誘った僕の提案を断り、夏子は、僕をコンビニとは私鉄の駅を挟んで反対側にある、静かな公園へと連れてきた。

「やつぱり、ちよつと冷えるね」

「…うん、そだね」

「大丈夫？寒くない？」

白い息を吐きながら、敢えて明るくそう問うと、夏子は「…うん、大丈夫。ありがとう」と小さく返してきた。僕はそれに「そう」と頷くしかなかった。

コンビニから、徒歩でおよそ十分ほどかけてやって来たそこは、オフィス街の中心から少しばかり逸れた、川沿いに設けられたもので。昼間などは多少なりと弁当を持ったOLなどで賑わう事もあるだろう幾つかのベンチも、今は僕達を除けば全くの無人。本当に、気温の事を無視すれば、僕達が話をするには最適の場所だと言えるのかも知れない。綺羅星を仰げるロマンチックな夜の公園…ではなく、仄暗い静寂さが漂う、まさに冬の公園といった雰囲気も合わせて。

事実、雲に覆われた空の代わりに、ふと視線を横に走らせた時に視界で瞬いた、辺りに立ち並ぶビルに灯る光点は、確かに見ようによつては美しかったけれど、幻想的だと呼ぶにはあまりにも人工的で、何より現実的すぎた。

僕は視線を夏子へと戻し、軽くジャンパーの裾を整えてから、後は黙って彼女の言葉を待った。

果たして、それは十秒程度か、それとももしかしたら一分以上が経った頃か。ようやく夏子が、「…あなたは、元気だった？」と口を開いてきた。「さつき、私に聞いたでしょ。だから今度は、あなたの番。…あなたは、元気だったの？」。

僕はそれに、それが冷たい反応だと知りながら、躊躇った素振りも見せずに頷いた。「うん、元気だったよ」。

すると夏子は、彼女もまた冷たい声音で答えてきた。ただし、その表情は冷たいと言うよりも、ただ虚しそうなものだったけれど。「私もね、元気だったの」。それから、こう続けた。「…本当にね。嫌になるくらい、普通に元気だった」。

僕は、何も言わなかった。なぜならば、何かを言った瞬間、何を言ったにせよ、きつと嘘を吐かずにはいられなかっただろうから。だとすればもう何も言わない方がマシだと悟った。頭の片隅で、いつだったか彼女に「元気を出せ」と一切の他意もなく言えていた瞬間の事を、まるで他人事のように思い出していた。そんな何も知らなかった頃の愚かな自分が、本当に懐かしく、悲しく、何より羨ましく想えた。

過去に戻りたいだなんて、これまでの人生の中では、ただの一度として願った事なんて無かった。それは本当に、母が死んだ時でさえ、そうだった。それなのに僕は、ほんの刹那であったけれど、確かにそんな無意味な妄想を抱いていた。しかも、それはまさしく、無様にも矛盾した自らの葛藤を慰める為…だけに。

夏子に元気を出して欲しいという言葉に支えられた過去のなかに、僕は彼女の為ではなく、己の為に、そう願ってしまったのだ。それも、きつと、神や悪魔にではなく。おそらくは僕が頭の中で都合良く創り上げた、「理想の夏子」へと。…彼女は、僕の行為の全てを理解して、受け入れて、そして許してくれていた。

「私…」

と、そこで不意に夏子が声を出し、こんな告白をしてきた。「…片岡かたおかさんと、前に言った彼と、付き合ってるの」。

僕はそれに、やはり、それが冷たい反応だと知っていながら、「そうなんだ」と笑顔を

返した。ただしそれはもしかしたら、単に、僕が彼女に「冷たい反応だと受け取って欲しい」と、勝手な願望を抱いていただけなのかも知れなかった。「それは、良かったじゃない」。

「……うん」

そつと頷いた夏子の様子から、その心情の全てを探る事は出来なくて。だからこそ僕は、そんな冷徹な自己分析を無視する為に、喋り続けた。「優しい人、なんですよ」。

「……うん」

「喧嘩とかしてない？」

「……うん」

「ちゃんと本音を聞いてもらえてる？」

「……うん」

そうして最後に、こう締めくくった。「……今度こそ、幸せになれそうかい」。

「……………」

しかし夏子は、それには答えてこず。「でも……」と、代わりに、こんなことを言ってきた。「……セックスは、あなたの方が、上手だった」。

今度は、僕の方が声を失う番だった。

「……昨日ね、初めて、あの人に抱かれたの」

「そう……」

「乱暴じゃなかったし、優しかったけど……。……でも、あなたとは違った」

「……………」

「でも、でもね……」

夏子は、そこで唐突に言うべきかどうか迷った風に言葉を切った。いや、それはむしろ言うべき言葉を探している」と言った方が正しいかも知れない。

だけど、待てども待てども、彼女はなかなかそれを見つけられないでいた。だから僕は、そんな彼女の、まるで罪の意識を抱えているみたいに、悲しげに歪んだ、それ以上に未知の不安に怯えているらしい表情を見て……。

「でも、安心して気持ちよくなれた。違うかい」

そんな問いかけを与えてやった。途端、夏子はある意味で結論的な答えでもあるそれに、一瞬、酷く切なげな、危うげな、そんな顔をした。

「私は……。その……」

けれど、それは同時に、まるで何も知らない幼子が、それでも感覚的には悟っている、正体不明の喜びや安らぎに、戸惑いながらもおずおずと手を伸ばそうとしている姿にも見える。

僕はその、決して強くないからこそ儂くも純粋な想いを宿している脆美せいびな表情に、思わず彼女を強く抱き締めてしまいたいようになった。それくらい、彼女の事を可愛いと想えた。だけ……。

「大丈夫。それは、可笑しい事でも何でもないんだよ」

僕は手を伸ばす代わりに、言葉を紡いだ。それこそが、つまりは愛しさの証明になるのだと、無知で無恥な僕にも分かったから。夏子は、そんな僕の目をちゃんと見つめてくれた。

「それはね。体だけじゃなくて、君の心こそが、彼に安心して抱かれる事が出来たって言う、紛れもない証拠なんだから」

「……………」

「君がそれだけ、そしてまた彼がそれだけ、互いに相手を想い合えてるっていう証拠さ」「わ、私は——」

絞り出すように言葉を吐き出そうとした彼女を遮り、僕は優しく微笑みながら言った。「本当に、良かったじゃないか」と。「そんな相手に巡り会えるなんて、もの凄く素晴らしい事なんだよ」。

「真吾っ……」

「勿論、まだまだこれからだろうけれど、それでも」

そして僕は心からの気持ちを込めて、言った。「本当に、おめでとう」と。

かすかに、夏子の瞳が見開かれた。そこに映っていた僕は、自分の方こそ驚くほどに、自然に笑えていた。…そう、僕は、笑えていたのだ。だから、これはきつと、正しい事なのだ。

「私は……」と、夏子は、そんな僕から僅かに視線を逸らして、ぽつりぽつりと話し出した。「…私には、そんな難しい事なんて、よく分からない……」。

「夏子……」

「でも、でもっ、私は——」

と、その時だった。何の前触れもなく、明るい電子音が夜の公園に響き渡り。彼女は反射的に、言葉の続きを呑み込んだ。

突然の闖入者に勢いを削がれた夏子に、僕は優しく「電話でしょ、出なよ」と促した。

「けど、今は……」

「大事な話だったらいけないじゃないか。大丈夫。僕はちゃんと、待ってるから」

「……………」

僕が頷くと、夏子は「…ごめん」と小さく言ってから、その場でコートのポケットから携帯電話を取り出した。

直後、彼女がはつとした顔になった。僕はそれだけで、電話の相手が誰なのかを悟った。

「……………」はい、もしもし」

夏子は、さらに数秒間ほど躊躇っていたものの、それでも僕が変わらず見つめていると、やがて決意したのかボタンを押して、それを耳元へと持っていた。

「……………」今は、その、ちよっと、会社に忘れ物して……。急ぎだったし……。だからそれを取りに来て……。あ、ううん、今はもう外で帰る途中……。え、電車で……。だ、ダメよそんなのっ……。それは、だって、もう夜だし、そっちは家なんですよ……。でも……

…うん…うん……でも、私……。あの、あのね、私」

そこで不意に、夏子が言葉を切って、僕の方を見た。

僕はそれに優しく、首だけを横に振って応えてやった。

彼女がどんな会話をしていて、どんな言葉を吐き出そうとして、どんな思いで僕を見たのか何て、確実には分からなかったけれど。でも、何となく、それが僕のすべき事だと感じられたから。

「……………」

夏子は、それにほんの数秒だけ口を閉ざしていたけれど。「……うん。分かった。待つてる。：大丈夫、近くのファミレスか何かに入ってるから」。やがて、再び意識を電話の相手へと戻して、そう言った。

そうして、その会話を最後に切られる電話。僕はそれを無言のままで見つめていた。夏子もまた、無言のまま手の中の携帯電話を見下ろしていた。

しばらくの間、静かな時間が流れた。

僕は、決して自分の方からそれを壊そうとは思わなかった。その時間を続けていたかったからではない。勿論、彼女とずっと一緒にいられるのなら、それはきっと僕にとってだけは、喜ばしい事であるだろうけれど。それでも僕はそんな思い以上に、その沈黙が、実は単なる準備の為の時間に過ぎないのだと分かっていたから。

そして確かに、その考えは間違っていなかったみたいだった。

「……片岡さんから、だった」

「うん」

夏子が、やはり携帯電話へ視線を落しながらではあったけれど、語り出した。ただしそれは、理路整然としたものでなく、ようやく浮かんだ言葉を端から順に、全て隠すことなく吐き出そうとしているような口調だった。

「今、何してるのって……。だから私、つい……嘘を、吐いちゃって」

「……」

「今は、『一人で会社の近くにいる』みたいな事を言ってる……。そしたら、なんか急に慌てだして。：なんかさ、『今から車で迎えに行くから』って」

夏子は、俯いていたけれど、泣いていなかった。だから僕は心配などしていなかった。

「良いつて言ったの。なのに、『心配だから』って。凄い真剣に、言ってくれたし……。でも、だから、だから私、本当は……」

それどころか僕は安心してさえいた。だからこそ、こう言った。「大丈夫だよ」と。とても自然に微笑めているだろうと、信じられていた。

ようやく、彼女がこちらを向いた。

僕と彼女の視線が一本に繋がった。「君はさ、君が思っている以上に、本当に魅力的なんだよ」。

「真吾……」

「分かるよ、それくらい。だって僕は、その程度には、君の事を分かっているって、そう確信しているからさ」

「……」

「大丈夫だよ、自信を持って。その片岡さんだって、やつぱりそう想っているからこそ、そんなに必死に、真剣になってくれているんだろうからさ」

「……」

「だから――」

忘れさせてやれる男など、もう要らない。満たしてくれる男が、現れたのだから。

だから僕は言った。だって、それこそが僕の役目なのだから。

「――幸せに、ね」

彼女は黙って、眼差しを揺らさずに、僕の言葉を聞いていた。その事実には、僕は、泣き

そうになるよりも遙かに強く、笑いたくなくなった。

もしも、多少の自惚れが許されるのであるとすれば、まだまだ未熟な僕じゃ消し去りきれない、想いの名残はあるのだろう。それがどんな要因によつて生じたものなのか。淋しさか、不安か、共感か、快楽か、はたまたもつと別の何かか、それは分からない。

だが、そもそもそんな事はどうだって良いのだ。だってそれはきつと、そう遠くない未来に、その彼が全てちゃんと癒してくれるだろうから。

だから僕は、笑っていいればいい。せめて今だけは、本当に、ただただ純粹に彼女の為だけに。

すると夏子は、そんな僕を少しの間だけ、じつと見つめ返してきて。

「……………うん」。やがて確かに、頷いた。

そんな顔も可愛いなと想った。それは、あえて言葉にするとすれば「泣き笑い」のような表情だったけれど。でも、決して涙は流れていなかったし。それはまた本当に、弱々しくも確かな「笑顔」であったのだから。

だから僕は…。

「元気で、ね」

「……………うん」

これで良かったのだと、そう思っていた。

∞

夏子を近くのファミリーレストランに送り届けてから、数分後。僕は二十四時間営業の銀行のATMを後にして、封筒に入れた、彼女から受け取った金の全額を握って街を歩いていた。

三千二百十五円……飛んで、百万円。先ほど見た口座の残高は、やけに不自然だったから。やはりこんななもの、無い方がきつと今の僕らしい。

僕は、それを手に街を進む。「…多分きつと、これが、僕にとつての初恋だったんだろうな」。同時に、心に痛みを抱いて。それらは本当に、とてもとても大きなものなのだろう。だけど、それでもその程度では、今さら絶望を買うには少しばかり安すぎる。

歩きながら思い出す。彼女と一緒に過ごした時間は、辛くもあつたけれど、確かに幸せであつたのだと。そしてきつとその想いは、例えほんの欠片であつたとしても、たつたそれだけで、些細な希望を買うにはお釣りが来るほどに十分なのだろうと。こんな僕でも、生きていたいと願える程度の「希望」を、だ。

と、そこで僕は駅前で募金活動をしている数人のグループを見つめる。傍らに立てられた看板には、〈娘に心臓手術を受けさせてやって下さい。娘を生かしてやって下さい〉と書かれていた。

「……生かして、か」

喉はすでに限界を超えているのだろう、懸命の声は酷く聞き取り辛く、それなのに何故だかやけに胸に直接響いてくる。いつからそこで立ち続けているのか、決して暑く無いのに、駅やその周囲から漏れる明るい光に照らされた上半身には、白い塩の跡が浮かんだTシャツだけしか纏っていない。

見ているだけで、心身共に辛い作業なのだろうと分かる。だって、それらが全て計算でやっていると判断するには、少しばかり、その眼差しが必死すぎたから。…いや、痛々しすぎたから。

だから僕は、そんな彼らの前へと行き。やがて「入るかな」と少しばかり不安になりつつも、父親だろうか、疲れ切った顔をしているにもかかわらず目だけは死んでいない男の抱いている募金箱の穴を見た。

「募金お願いしますっ」。即座に、ざらついた訴えが届いてきた。

僕は、「生きられる様に、頑張ってください」、そう言って、持っていた封筒を丸ごと、募金箱の中に入れた。半ば無理矢理に押し込んだ拍子に中身が顔を覗かせて、彼が目を剥いた。不謹慎かも知れないけれど、ちよつとだけ、その顔は面白かった。

「ちよ、ちよつと…」

「良いんです。丁度、『お釣り』の分で余っていたので」

「でもー」

「じゃあ」

そして僕は半ば呆然とする彼らに背を向けて、歩き出す。僕なんかを呼び止める声を出す暇があるのなら、もつと何度でも死に物狂いで娘の為に叫べばいいのだ。もしかしたら、その声を聞いて、また僕みたいな人間が現れる可能性だってゼロじゃないのだから。

数瞬後、背後から信じられないほどの感謝の叫びが聞こえてきて。僕はそれに、気恥ずかしさを覚えつつも、決して少なくない爽快感みたいなものを感じて、足を進めた。

彼らに同情したわけでは、無かった。娘を憐れんだわけでも無ければ、愛情と哀情をはき違えたわけでも無い。

ただ、思っただけだ。僕にとって、彼女のそれがそうであったように。彼らにとってもまた、その娘の微笑が、時にはいっそ残酷だとさえ思えるほどの希望になっているのだろうと。些細な瞬間、ありふれた刹那、たった一時の幸せが、全てを諦めるにはあまりにも惜しいものとして、その身と心を捕らえて放さない。例え他者の目には残酷に映ってしまったかも知れない希望だとしても、その本人達にとって見れば、それはすなわち幸せの断片なのだから。だとすれば、何があっても絶対に離したくないはずなのだ。

そしてだからこそ、僕は、それを認めたいと思った。決して「信じたい」ではなく。それを紛れもない事実として、肯定したかっただけだ。他の誰でもなく、僕自身の為に。そうすれば、もしかしたら、またいつか。僕の前にも再び、そんな欠片が現れてくれる可能性だって、ゼロじゃないのかも知れないのだから。

そうして僕は、もう迷うことなく、前に進む。街を歩き、店に着き、松本くん「ありがとう」と言って、制服に着替え、レジに立ち。

再び、いつも通り、滅多に客の来ない深夜のコンビニで、時給九百七十円の時間をこなしながら、その日その日を何とか生きていく為だけの金を稼いでいく。体ではなく時間を

売って、日々を紡いでいく。

きつと、いつまでもこんな生活を続ける事は出来ないだろう。時間は無限ではない。だから間違いない、いつかはどうしようもなくなってしまう時が来るだろう。それどころか、もしかしたらその刻限は、その「いつか」は、僕が望む時よりもっとずっと早く訪れてしまうものなのかも知れない。

だけど、それでも、今だけは本当に……そう、気分が良いから。

無性に悲しくて辛くて寂しいけれど。満ち足りた幸福になんかほど遠いけれど。それでも、確かにほんの少しだけ、気分が良いから。

「いらっしやいませ、お預かりしますね」

だから僕は……。

「お買い上げ、ありがとうございます」

……生きるんだ。

〈了〉